

平成23年度 県立広島大学重点研究事業  
学部プロジェクト研究

国際交流の継続と  
異文化コミュニケーション  
能力向上に関する研究

報 告 書

平成24年3月

県立広島大学人間文化学部

# CONTENTS 目次

研究の概要	丸山浩明	3
-------	------	---

## 研究報告

### I 国際交流の継続

1 ソウル市立大と交流 (I)		
・ 交流行事の報告と展望	鄭 遇 澤	7
・ 学生の報告		
(1) 授業見学から学んだこと	杉山竜平	14
(2) 何かを伝えるために重要なこと	折田涼子	15
(3) ソウル市立大訪問と学生との交流を通して	巻木真理子	17
(4) 学生交流とコミュニケーションの工夫	今崎香織	18
(5) 韓国ソウルで感じたこと	中須賀薫	20
(6) 食事からみる韓国	秋田早苗	21
ソウル市立大と交流 (II)		
・ ソウル市立大における英語教育、あるいは英語に よる講義の実態について	吉本和弘	24
2 ハワイ大と交流		
・ ハワイ大ヒロ校マノア校訪問	Steven L. Rosen	26
・ ハワイ大マノア校とのパートナーシップに向けて	原 理	33
・ 2週間特別英語プログラム (サンプル)		37

### II 外国語能力の向上

#### 語学力の検証

1 TOEIC, TOEFL 試験の結果分析	吉本和弘、西原貴之	38
2011年度韓国語能力試験の結果分析	鄭 遇 澤	43
中国語検定試験の結果分析	丸山浩明	47

### III コミュニケーション能力向上のための演劇教育

1 International Theatre Company London (ITCL)による演劇ワークショップと舞台公演『デイヴィッド・コパフィールド』	吉本和弘	49
--	------	----

まとめ	樹下文隆	60
-----	------	----

# 研究の概要

丸 山 浩 明

## はじめに

本研究は、平成20年度に実施された県立広島大学重点研究事業、人間文化学部プロジェクト「コミュニケーション能力の向上をめざす学部教育の改善」を発展させ、さらに平成21年度に展開された同「国際交流の促進と国際コミュニケーション能力向上のための調査・研究」の成果を継承している。特に、一昨年より力を入れて推進してきた国際交流においては、大学全体としての国際交流推進部門の設置が決まり、全学の方向性がようやく明らかになりつつある。これまでの本学部の取組がその礎を提供していることはあらためて注目に値しよう。また、主題に据えているコミュニケーション能力については、日本人同士の間にあっても諸々の問題が生じやすい現在、一言語間内での範囲を超えて世界規模地球規模でわかり合うためのツール（道具）として外国語能力の具体的な修得が叫ばれている。そこには、ボデーランゲージ（身体表現）をも含めた意思伝達のための能力向上が必須である。そこで、本年度は国際交流面での継続のための研究とコミュニケーション能力・外国語運用能力の具体的な調査を充実させることにより、教育における今後の課題を明確化させる目的で本研究事業を実施する。

## 1 研究の目的

### （1）研究の全体構想

本年度の研究はその目的と事業の継続性ことから、国際文化学科の教員が主体となって推進する。国際文化学科では、国際理解・比較文化・コミュニケーションを学科共通の専門分野に定めている。これらはいずれも独立して価値ある教育内容を擁するとともに、相互に関連して相乗の教育効果を生じさせる。そこで、異文化コミュニケーションの能力を向上させることを目的に、以下の3つの面から研究を進める。

- ① 国際交流の継続
- ② 国際理解のための外国語能力の向上
- ③ コミュニケーション能力向上における演劇教育

### （2）研究の背景

#### ①国際交流の継続

一昨年の同学部プロジェクトにおいて、国際交流の点から線への発展を目指し、すでに学術交流提携を結んでいる各校への再視察等を行った。中国西安交通大学へは、教員と学生を合わせて派遣し、今後の交流のあり方を模索すると同時に、学生相互の

交流を実践した。韓国ソウル市立大学とハワイ大学ヒロ校へは教員を派遣し、交流の足固めの再確認を実施した。

この結果、中国西安交通大学との交流においては、これまで同様先方の交換留学生を受け入れるとともに、本学科からも引き続き留学生を送り出している。ハワイ大学へも留学生を送り出すことが軌道に乗り始めているが、利便性から考えて以前短期研修で関係のあるマノア校との提携を再度模索したい。また、今回は韓国ソウル市立大学へ教員・学生を派遣し、交流を実施するなかで、2つの点を発展させたい。一つは、教員間の外国語教育とくに英語教育のメソッドの交流、二つには、学生の韓国・朝鮮語の研修と交流である。

## ② 国際理解のための外国語能力の向上

学内の外国語検定資格試験の受験促進は前年度今年度とも学科の年度計画等にも掲げている課題であり、一昨年以上に多くのデータを得られるよう、TOEIC, TOEFL、中国語検定、韓国語検定の受験促進とそのデータ分析を行う。このことは、学生の外国語能力の実態を把握し、今後のカリキュラム検討にも役立つと推測される。

## ③ コミュニケーション能力向上における演劇教育

国際文化学科では、重点研究・高等教育推進研究において、平成17年度よりロールプレイング手法をとる模擬国連や様々なアクティビティを授業に導入する事業を実施してきた。もちろん学生参加型の授業を実施してきたものの、授業プログラムそのものは教員が作成しており、また、学生のコミュニケーション能力を向上させるための具体的な指導をしてきたわけではない。この過程で、機会・場を提供するだけではなく、プロジェクトを実行していく力、そしてコミュニケーション能力を向上させるための具体的な方法を明らかにしなければならないということが課題として浮かび上がってきた。そこで、この課題解決のために、演劇手法の導入と学生が授業で学んだことを総合的にプレゼンする場を設定し、そのイベント・プロジェクトを学生自らが管理・運営・実行するような教育プログラムの研究を実施しよう、という着想に至った。

また、外国語運用能力の向上との関連から英語を用いた授業も複数展開している。そこで、英語劇等を主軸にその鑑賞や実演、そのためのワークショップを取り入れた演劇教育を企画し、教育の可能性や効果を調査することとした。

## 2 研究の計画・方法

### (1) 国際交流の継続

#### ① ソウル市立大学との交流促進

交換留学生の受入・派遣の実績を積み重ねてきた韓国ソウル市立大学との交流を、

教員の交流による共同研究への段階へと推し進めるために、関係教員を派遣し、提携研究の可能性を調査する。同時に、韓国・朝鮮語履修者のうち短期研修・交流事業参加者を募り、現地での学習や日本文化、本学の紹介などを行い、先方の教員・学生と交流する。

## ② ハワイ大学マノア校の視察

一昨年の同プロジェクトの成果をもとに、教員をハワイ大学マノア校に派遣し、教育・研究面での交流や連携の可能性を探る。また、ヒロ校との交流について再度見直しを図るため、留学プログラムの実態を調査する。

## ③ 西安交通大学との交流促進

教員を西安交通大学に派遣し、先方の教員・学生と交流する。とくに、外国語教育（英語教育・日本語教育）の現場を視察する。

## （２）国際理解のための外国語能力の向上

国際文化学科の年度計画に挙げている TOEIC, TOEFL、中国語検定、韓国語検定の受検促進とそのデータ分析を行う。いずれも、調査のための検定料等はプロジェクトの予算に組み入れる。

① TOEIC, TOEFL については、学内で実施予定の IP,ITP の夏季・冬期検定試験を利用し、英語履修学生の受験結果の具体的なデータ分析を実施する。

② 中国語検定試験については、秋季実施予定の検定試験を利用し、２年生３年生を中心に４級３級の受験を推進し、その結果を分析する。

③ 韓国語検定については、秋季実施予定の検定試験を利用し、初級の到達度を分析する。

## （３）コミュニケーション能力向上における演劇教育

国内外の演劇教育・プロジェクト学習に関する成功事例について調査する。学科においては、すでに英語劇や模擬国連を内容とする複数の科目でロールプレイングの手法を取り入れているが、参加者へのアンケート調査やインタビュー調査を実施し、教育効果を測定する。

また、英語劇を専門とする劇団を招聘し、その劇を鑑賞し同時にワークショップを開催することで、英語を通じた演劇教育を実施する。さらに、演劇の専門家を招き、プレゼンテーションに関する教員および学生向けのワークショップも実施する。

これらにより、国際文化学科の教育にどのような演劇手法を導入することが効果的か、また、どのようなプレゼンテーションの機会（語学劇や模擬国連などの発表会）が適切で、実現可能かについて明らかにする。

### 3 予想される結果と意義

国際文化学科の教育目標である「既成概念にとらわれない柔軟な発想で、現代社会に対応できる問題解決能力と外国語運用能力を備えた人材育成」の具体的方法を明らかにすることができる。この異文化コミュニケーションの向上を目指す研究は、学科教育の枠にとどまるものでなく、大学全体が取り組むべき課題である。「国際」の名を冠した本学科では、教育の実践を通じた確かなマニュアル作りを実現できると自負している。もちろん、国際交流における実地体験を重ね、教育・研究の分野で新たな成果を生み出すことが更なる大学の活性化につながることは間違いない。加えて、国際理解に基づく問題を地域の中に投げ返し、また地域社会の活力を国際理解やコミュニケーションの立場から見直すことも次の取組を模索する大きな基盤となろう。

### 4 追記

このプロジェクトが採択された後に、国際交流推進部門主催の事業が募集され、その中で本プロジェクトとの連携から、年度内に中国西安交通大学での短期語学研修とハワイ大学マノア校での短期語学研修とが実現した。いずれも本プロジェクトにおける調査の成果や本学科のこれまでの交流実績が評価されたものである。

# ソウル市立大学校との交流（Ⅰ）

## 1 交流行事の報告と展望

チョン ウテク（鄭遇澤）

2011年9月20日（火）から9月23日（金）まで3泊4日間の日程で、ソウル市立大学校を本学の教員と学生たちが訪問して、相手の教職員と学生たちと交流を行った。ソウル市立大学校との相互交流は、県立広島女子大学国際文化学部の中から相手方の国際関係学科との間で結ばれて以来続けられてきたが、県立広島大学の新体制になってからはこれまでの交流関係を拡大して大学間レベルの交流を活性化する方向が打ち出された。県立広島女子大学時代は、毎年互いに3人の交換留学生を送ったり受け入れたりしてすでに多人数の交流があり、次世代の相互理解の役割をずいぶん果たした。近年では此方からソウル大学校への留学希望者が減っている状況であり、国際交流の拡大・発展のために、新たな環境設定と交流の継続を求めて、今回の交流事業を行うことになった。

今回は人間文化学部のプロジェクト（「国際交流の継続と異文化コミュニケーション能力向上に関する研究」）の一環として実施した交流行事の結果を報告する。

交流行事のための事前準備の過程として、参加学生の募集（6人）を行った。韓国の言語と文化を体得する良い機会なので、面接を通じて韓国語学習者を優先的に選抜した。さらに交流会のための準備作業（8月～9月、4回の集まり）を実施した。その内容は、広島と県立広島大学の紹介する資料の準備（冊子の手配や検討）、現地での注意事項の熟知、訪問地に関する事前情報収集（個人分担と共同勉強会実施）であった。

交流行事の主な目標、結果と評価を項目別に述べる。

（1）交流のレベルを高めるために教員間の交流と共同研究の可能性を打診する。

研究者教職員間の交流を拡大し、協力し合うために、今後、どのような具体的取組が有効かを話し合った（韓国学センター長との面談）。シャトル・セミナーの開催、教員の交換講義、希望する教員の派遣、国際セミナーの開催時の招待 など、両方の学校の状況に合わせて、実現可能な方法を協議し進めることが挙げられた。これらはいずれも交流として実施の可能性を有するので、協議の窓口を設定し具体的な計画を立案することによって、さらなる理解が深められると考えられる。また、問題点としては、ソウル市立大学校には日本学関係の学科が設置されていないので（中国語文学科は設置されていた）、此方からの教員派遣には困難が伴うかもしれない。しかし、外国語教育やその他アジア関係の経済・国際理解など、今後共同で研究することは有意義

であろう。

(2) 直接的な出会いを通じて教員・学生がお互いに理解を深める。

今回の交流事業の一番大切な目標・内容である。日程上、ソウル市立大生との交流の機会が三日間取れたので、良かったと思う。資料やパワーポイントを利用して、広島と県立広島大学を紹介したり、大学内の施設見学や市内の歴史文化遺跡の見学にも学生が案内役を務めてくれたので、親密な交流の時間が持てた。今後の交流のあり方を考える上でも、良い先例を残したと思う。

また、夏期にはソウル市立大が企画実施しているサマースクールがあり、本学の学生も利用してきたが、学年歴の関係から利用時期に制限が多い。そこで、此方から短期留学と研修をより活発に進めるために、ソウル市立大国際交流担当者に対して、5人以上を条件に、県立広島大学生のための短期語学研修プログラム（1－3週）をつくって貰えるように協議した。特に問題が無ければ、冬休みを利用して学生の短期研修を送ることが出来ると思う。なお、長期留学生のために、奨学金や韓国内にてのインターンシップも準備出来ることを確認した。また、来年度には今回の交流団の中から長期留学を希望する学生が出て良かったと思う。

(3) 異文化コミュニケーションの一部として、歴史文化に関する直接体験の機会を提供する。

両校の学生が交流することが主目的であり、大切であるが、同時に韓国の歴史・文化に対する理解を深めることも、国際理解の面から重要である。そこで、博物館等の見学に加えて、人々と直接触れ合うことが出来る、町巡りに時間を割いた。

出会いが無ければ理解もないこと。韓国のコトワザには‘トナリがイトコである。’というものがある。

今後も、形式にこだわらない着実な交流の行事が多くなることを望む。

## 2. <交流団> ソウル市立大学校との交流事業参加者名簿

● 県立広島大学人間文化学部 : 8人 (教員 2人、学生 6人)

氏名	役割分担	
吉本 和弘	引率。英語教育分野の視察。交流協議。	
チョンウテク (鄭遇澤)	引率。交流実務。交流協議進行	
杉山 龍平(3年) 折田 涼子(3年) 卷木 真理子 (2年) 秋田 早苗 (1年) 今崎 香織(1年) 中須賀 薫(1年)	県立広島大学と広島の紹介 市立大生との直接交流 ソウルでの多様な文化体験	
* 窪田 彩乃(大学院1年)	現地で、交流会以降 合流 (二日めの交流会 IIIから)	

● ソウル市立大学校の主要受け入れスタッフと参加学生 : 教職員 5人、学生 8人

氏名	職務と役割	
教員	モク チョンス	韓国学センター長 (教授)
	パク キヨン	前任 韓国学センター長 (教授)
	ユン ヨンソン	ミョンジ大学 教授 (元 県立広島大教員)
職員	ソン サンジン	国際教育院 国際交流コーディネータ
	キム ナムヒ	国際教育院 英語教育担当コーディネータ
学生 :		
イ ゼソン (女、法学科)	ソウル市立大学とソウル市の紹介	
ユ ホジョン (女、社会科学)	県立広大生との直接交流	
キム コンス (男、社会科学)	ソウル市を同行案内して貰う。	
ソ ボビン (女、韓国史学科)		
イ ミンジュ (女)		
ユク サンド (男)		
チェ ミソン (女)		
外 1人 (姓名未詳)		

### 3. 日程 実施記録

月日	時間	内容	備考
9.20 (火)	07:05	広島駅 集合	
	09:40	広島出発	
	11:30	仁川到着	
	14:30	ソウルのホテル到着	
	16:00-21:00	韓国伝統文化体験(伝統劇 観覧及び夕食) ＜韓国文化部運営劇場＞ 市内見学	
	21:30	宿所	Hotel

月日	時間	内容	備考
9.21 (水)	10:00-11:00	対面式と挨拶（ソウル市立大学国際教育院の関係者） 国際教育院の見学（施設と program の案内） ●英語教育に関する紹介をもらう。（英語教育担当教員）	全員
	11:00-12:00	韓国学センターにて、韓国語の授業（初級）参加	学生、教員
	12:00-13:00	昼食（現地の学生食堂で）	
	13:00-15:00	学生同士の交流会 I ●対面式と自己紹介 ●両方の学校と地域の紹介：資料の提供、記念品の伝達 など	全員 (ソウル市立大生7人)
	15:00-18:00	交流会 II ●学生たちの自由交流の場（校内外での廻り） ●交流実務者たちの懇談会 －交流に関する情報提供、現況報告、 －今後交流の深化推進に関する論議 －両方の留学生の近況の確認 など	学生、教員

	18:00-20:30	交流会Ⅲ ●両方の教職員及び学生だちとの懇親会 (学校近所の食堂) ●21:00-23:00 までは教員のための懇談会	全員 (此方9人、ソウル方11人)
	21:00	宿所 (ソウル市立大学の GuestHouse)	

月日	時間	内容	備考
9.22 (木)	-10:30	宿所移動	hotel
	11:00-14:30	班村探訪(北村)(昼食)	市立大生の同行(4人)
	14:30-16:00	古宮(チャンドグン)	
	16:00-20:30	ソウルタワと明洞	
	21:00	反省会	
	-24:00	宿所	Hotel
9.23 (金)	10:00-14:00	明洞と在来市場見学	
	16:00	空港到着(18:40発)	
	20:10	広島到着	
	21:40	解散	広島駅



ソウル市立大学校の国際教育院国際交流の場 外国語カフェ



ソウル市中心地の光化門広場で



交流会でのプレゼンテーション



食事会で挨拶する吉本先生



チャントク宮でソウル市立大生とともに



南山にて



明洞散策

## 4. 学生の報告

### (1) 授業見学から学んだこと

杉山竜平

私は、今回ソウル市立大学との交流事業の一環で、ソウル市立大学が外国人留学生向けに開いている韓国語学の講義を見学しました。そこで感じたことを報告したいと思います。

まず感じたのは、講義の進行の仕方の違いです。私が見学した講義は韓国語初級の講義で、中国やモンゴルなどアジア諸国からの留学生をはじめ、欧米からの留学生もいて、見るからにグローバルな環境でした。この講義は、韓国語がほとんどできない外国人にハングルの読み書きという基礎を教えるという講義でしたが、日本で見られるような机の上だけの勉強ではありませんでした。まず、机の配置から異なっていました。私が見学した講義では机をコの字に並べて、先生が真ん中に立ち、学生たち一人一人に話しかけるような講義のやり方を取っていました。日本の講義では、先生の目を盗んで寝ていたり携帯をいじっていたりする光景がよく見られますが、机をコの字にすることで先生の目が学生全員に行き渡り、学生側も真剣に講義に参加していました。また講義の進行も、真ん中の空いたスペースを使って、学生全員が参加できる伝言ゲームを取り入れるなど、学生と先生、また学生同士のコミュニケーションが積極的に行われ、韓国語初心者が韓国語に興味を持てるような授業プログラムが組まれていました。このような学生参加型の講義は、知らない外国語に挑戦する学生にとって有効な講義プログラムではないかと感じました。学生が積極的に参加できる講義を受けたいので、とてもうらやましいとも感じました。

次に、学生の積極性の違いです。日本の大学では、学生が積極的に先生に質問したり、授業を中断してまで学生と先生が議論するという光景はほとんど見られないと思います。私が見学した講義では、欧米や中国から来た留学生が積極的に分からない所を質問して、先生もそれに逐一応えるという光景が見られました。また、先生が説明したことに対して必ずあいづちを打っていました。あいづちは話を聞いていなくてもは打てないもので、学生が講義に積極的に参加しているということが伺えました。このように、学生自身の積極性も留学生は、日本の大学生に比べて高いと感じました。このような高い意志を持って学生生活を送ることができていたら、どんなに充実した学生生活を送ることができるのだろうかと感じました。

このように、今回の交流事業で驚いたことはたくさんありましたが、そこから感じたことは日本の学生の消極性や視野の狭さです。私は、去年の夏休みも一カ月間韓国に滞在して韓国の大学生と交流をしましたが、海外の同世代の学生たちの状況を知り、今のままではいけないと思いました。というのも、韓国の大学生は TOEIC の点数が

900点ないと恥ずかしくて履歴書に書けないという話を聞いたからです。日本の大学生、県立広島大学国際文化学科の学生でTOEIC900点を取ることができる学生が何人いるのかと考えたら日本の大学生の努力不足を感じました。同じアジア圏で英語を公用語としていない国なのにこの違いはどこから生まれてくるのかと衝撃的でした。自分自身の大学生活における意識の低さをまざまざと感じました。この経験から学生生活に対しての意識が変わりました。このように、外に出ることから得られることもたくさんあります。偉そうなことは言えませんが、私は日本の大学生はもっと外国の同世代の状況を知るべきであると思います。私もそうであったように、現在の学生生活を見直すいい機会になると思います。私は、この交流事業に参加して、広い視野を手に入れることができたと感じています。

## (2) 何かを伝えるために重要なこと 折田涼子

私は高校のころから韓国との国際関係、文化などに興味を抱いており、これらのことをもっと学ぶために県立広島大学に入学しました。大学の授業でもこのことについて勉強してはいましたが、実際に韓国の文化を体験したり、韓国の同年代の学生と話したりする機会はありませんでした。その様な時にこの交流会が開催され、運良く参加させてもらえることになったのです。

大学の授業で韓国語を勉強しましたが、私はほとんど韓国語を話せません。辞書があれば文章を読み書きすることはなんとかできましたが、聞き取ったり話したりといった実践的なものはまだ身につけていませんでした。そんな私が、果たして韓国に行って韓国の学生と交流ができるのだろうか？ そのような不安を抱きながら日本を離れました。

しかし、この交流事業に参加したことで、私はコミュニケーションをするときに一番重要なことは気持ちであるということ学びました。特に、舞台の観劇と学生との交流の中で感じたことを紹介していきたいと思います。

韓国に着いた日の夕方に、貞洞劇場で伝統芸術舞台「Miso(美笑)」を見ました。この舞台は、韓国で最も有名な古典である「春香」を反映したストーリーです。パンフレットには簡単にあらすじが書かれていましたが、今まで韓国の古典作品に触れる機会がなく、韓国語の舞台を観てもわからないのではないかと考えると不安でした。しかし、実際に公演が始まると、そのような悩みも無くなりました。

この舞台は韓国の方だけでなく韓国に旅行に来た多くの外国の方が見られる舞台であるため、ほとんど歌や台詞がない舞台になっています。主に音楽によってストーリーや情景を、役者さんの踊りと演技によって登場人物の感情を表現し、韓国語がわか

らない人にも韓国文化を伝えることのできるような構成でした。煌びやかな韓国の伝統的な衣装や優雅な踊りと演技、迫力のある生の楽器演奏に圧倒されながら、初めて感じた不安も忘れて 90 分間ずっと見入ってしまい、伝統的な古典の舞台という難しそうなイメージはいつの間にか払拭されていました。特に役者さんたちの演技は情緒に溢れており、顔の表情だけでなく体全体の動きを使ってキャラクターの悲しみや喜びなどの感情を表現していたように思います。

この舞台を見終わってわかったのは、物事を伝えるためのツールは決して言葉だけではないということです。言語という手段を使わなくとも、音楽や動きを媒介として相手に何かを伝えることができる。この舞台でそのようなことを学べたため、4 日間異国の地で生活するという不安を緩和することができました。

9 月 21 日と 9 月 22 日には、ソウル市立大学の学生との交流がありました。このプログラムは交流会の予定の中で、一番楽しみで一番不安なプログラムでした。同年代の方と話すことは今回の交流会の一番の目的であったけれども、やはり違う国の違う文化の人と話す為には私の拙い韓国語では不十分だと思ったからです。

交流会の初日には県立広島大学の学生二人とソウル市立大学の学生二人の 4 人が一つのグループとなり、大学構内を巡りながらいろいろな話をしました。ソウル市立大学の学生の中には日本語が堪能な学生もいましたが、私と一緒にグループになった方々はそれほど日本語が堪能ではなく、私も韓国語があまり話せないのが最初はなかなか意思の疎通が図れませんでした。特に、出会ってすぐの時はとても緊張してしまって、冷静に考えればわかるような単語を聞いても混乱してわからなくなっていました。こちらから話しかける時も私の発音が悪くて相手が聞き取れないことが多く、言いたいことが伝わらないもどかしさで苦しくなりました。

それでも私は辞書を使いながら韓国語の単語を、相手も極力わかりやすいように韓国語の単語と英語を駆使しながら、身振り手振りで説明しながら会話しました。言いたいことが伝わらなくともお互いに落ち込まずに、聞き取りやすいようにゆっくりと話す。それでも伝わらないときはさらに簡単な言葉をつなぎ合わせて説明する。そんな風に交流していくうちに段々と相手の言っている言葉の意味がわからなくても、相手の言わんとしていることがなんとなくではあるけども分かってくるようになりました。数時間もすると、相手の声のトーンや顔の表情、体の動きなどから相手の感情が伝わってくるということに気が付き、お互いに母国語を話していても楽しさなどの感情を共有できるようになっていました。

この交流の中で学んだことは、伝えたいという意欲を持ち、わからなくてもとにかく話しかけたり相手の言葉に耳を傾けたりすることが大事だということです。学校で学ぶような文法や単語の勉強も大事だと思いますが、この伝えたいという意欲を持つ

ことこそが、何かを学ぶ上で一番重要なことなのではないかと感じました。

この交流事業に参加してみて、何かを伝えるためにはどうすればいいのかということを考えるようになりました。海外に行かない限り言葉が通じないという環境で過ごすという機会はなかなかありません。今回初めて海外に行き言葉が通じないという環境でたくさんの人と交流する中で、「これを伝えたい。伝えなければ。そのためには一体どのようにすればいいのだろうか」と考えることの重要性に気づけたように思います。

この経験を生かして、今後は何事に対しても伝えたいという意欲を持ちながらぶつかっていきたいです。

### (3) ソウル市立大学訪問と学生との交流を通して

巻木真理子

今回の学部プロジェクトを通して、さまざまな経験をする事ができた。この報告では、今回のプロジェクトの中心の目的であったソウル市立大学との交流について書く。

ソウル市立大学では、まず、韓国語の授業を見学した。私が見学したクラスは、文字を覚えるなど韓国語を学び始めた人を対象とした初級の授業で、すべて韓国語で行われ、受けている学生は日本や欧米、中国などさまざまな国から来ている15人ほどであった。授業を見ていると、さまざまな工夫がされていることを感じた。1つ目は、机の配置をコの字形にし、皆がお互いの顔を見ることができるようになっていることである。2つ目は授業の中にゲームを取り入れていることである。私が見学したクラスでは、マスの書いてある紙に単語を書き入れ、ペアになって互いに1つずつ単語を言っていき、マスに書いた単語を消し縦、横、斜めをそろえるビンゴ形式のゲームや、2チームに分かれてそれぞれ1列になり、小さな声で順番に次の人に単語を伝えていき、最後の人が黒板に書いて回答するといった伝言ゲームなどの要素を取り入れていた。このような工夫がされていることで、学習の内容を記憶に留めやすくなり、楽しみながら、アットホームのような雰囲気の中で学べるような授業が行われているという点が大変興味深かった。

交流会では、ソウル市立大学の学生が参加して広島とソウルについての紹介や、互いの大学の紹介を行った。紹介を通して、ソウルはやはり韓国の首都であるということで、多くの人や物が集まっている都市で、とてもエネルギッシュなパワーがあると感じた。その中にあるソウル市立大学はソウルの発展に貢献できる人物を育てるといったことを目標として挙げており、政治、経済、人文、自然科学、都市科学、芸術、教育などの多分野にわたる学部をもち、毎年、ソウル市立大学を卒業した多くの学生

が、ソウルにおいて、さまざまな分野や場面で活躍していることを知った。

交流会の後、いくつかのグループに分かれて、ソウル市立大学内を実際に歩いて回りながら、学生に案内をしてもらった。さまざまな学部が1つのキャンパス内にあるため、とても広く、学部ごとに分かれて大きな校舎が建てられていた。時間の関係で、すべての建物の中までは見ることはできなかったが、きれいに整備されている大学であった。また大学内にフィットネスセンターがあることにとても驚いたり、コンビニや学食など、一か所のみではなく、離れて数か所つくられていたりするなど、とても便利さを感じた。それから面白い施設だと感じたのが外国語カフェというものである。曜日によってそれぞれ英語、日本語、中国語などの言語のみで話す日が決まっていて、カフェに集まった人同士でその言語で話ができる場所であるそうである。さまざまな国から来ている人同士が出合い、交流できる場になっていて、とてもユニークな取り組みだと興味深く感じた。

大学を案内してくれた4年生と2年生の女子学生2人は、とても気さくで、大学内を一緒に回りながら丁寧に案内をしてくれた。2人とも日本語を話すことができ、互いに片言ながらも、日本語、韓国語、英語、ジェスチャーなどを交えながら、自分自身のことや、大学について、日本と韓国の最近の流行のこと、その他日韓の文化のことなどさまざまな話をすることができた。私は以前から、同年代の韓国の学生がどのようなことを考えているか、どのようなことに興味があるのかということにとても興味があった。今回は短い間だったので、それほど深くは話をすることができなかったが、その短い時間の中でも韓国の同年代の学生との話を通して、考えなどを知ることができ、私にとってとても貴重な体験となった。しかし反対に、会話の中で日本について聞かれたときに、正確に答えられないということもあった。相手にとってみれば、私は日本人の代表として映るため、あやふやな回答はできないと思った。自分が生まれ育った日本についてもっと知り、しっかりと説明できるようになればならないということを実感した。

最後に、今回のソウル市立大学を訪問し、学生との交流などを通して、もっと深く韓国や韓国人々について知っていきたく強く思った。この学部プロジェクトを新たな出発点として、語学力をさらに伸ばし、今回得たさまざまな経験を大学やこれからの生活などで生かしながら、成長できるようにしていきたいと思う。

#### (4)学生交流とコミュニケーションのための工夫

今崎 香織

ソウル市立大学の学生さんに大学を案内してもらったり、ソウル市内を一緒に観光したりして、一緒に活動していく中で、日本語と英語を交えてのつたない会話ではあったが、お互いの学校のこと、どんなことが流行しているのかなど、たくさんのこと

を話した。今回の報告書では、ソウル市立大学の学生さんと話した中で驚いたこと、考えさせられたことを書いていこうと思う。

2日目の午後からソウル市立大学の学生さんと会い、お互いに学校とソウル、広島についてそれぞれ発表し、その後は、4人グループに分かれて大学内や、大学周辺を案内してくれることになった。私のグループを案内してくれたのは、1年生のキム・カンズーさんと、大学院生のユ・サンドクさんだった。まず、大学の中を案内してもらったのだが、県立広島大学とは異なり規模の大きな大学なので、とても驚いた。たとえば、屋内のスポーツ施設があったり、道のそばにベンチと机が多く並んでいたり、バスケットなどができる小さなグラウンドがあった。空き時間にスポーツを楽しんだり、友人と気楽に話せるスペースが多くあるというのはとても魅力的だと思った。次に、ソウル市立大学の学生やソウル市民がよく訪れるというオリニ大公園へ案内してもらった。ソウル市立大学からバスで30分ほどにある公園で、動物園や広い原っぱ、そして、静かな散歩道があった。大学内も周辺も静かで落ち着くことができる環境が県立広島大学より多いなと思った。

3日目は、ソウルの観光名所をソウル市立大学の学生さんと一緒に観光した。まず、韓国の昔の街並みが残る「北村」、世界文化遺産に登録されている「昌徳宮」、そして、ソウル人気スポットの「Nソウルタワー」を観光した。その日に特に印象に残ったのは、1年生のウォンビンさんのドラマの話だった。彼女は、韓国で放映されていたフジテレビドラマ「大奥」を見て日本に興味を持ったといい、ドラマの内容はよく分からなかったのだが、女優が来ていた着物の美しさや髪形の複雑さを面白いと思い、自分でもそれらについて調べたという。私は、韓流ドラマを見るときは好きなスターや、ストーリーの面白さにばかり意識が向いてしまい、ドラマに出てくるちょっとした文化などは見ていなかった。この話を聞いて、ドラマから日本について調べてみようと思ったウォンビンさんはすごいと思った。また、私も韓流ドラマを見るときはウォンビンさんのように韓国の文化を探してみようと思った。

4日目は、ソウルの繁華街と言われている明洞へ行った。そこで驚いたのは、店員さんの名札の下に、その店員さんが話せる言語が国旗入りで表示されていたり、日本語で商品の説明ができたりしたことだった。今、日本では韓国の化粧品がとても人気があるが、それは、価格が日本よりも安かったり、カタツムリのクリームなど日本にはない面白い商品があるからだろうと思っていた。しかしながら、日本語で商品を説明してもらい、自分が商品の効果などを納得した上で買うことができるのも、韓国の化粧品が人気の理由の一つなのだと思う。そのために、外国語を勉強する店員や、外国人の客に購入しやすいような雰囲気を作るお店の工夫に驚いた。

今回ソウル市立大学の学生さんと交流して、とても積極的な学生さんが多いと思った。授業に参加した時も、机をコの字型にして、先生と生徒の会話を増やしたり、生徒同士での会話練習を活発に行っていたのが日本の学校の外国語の授業との違い、とても積極的だった。私も途中から参加することになったのだが、どんどん会話練習に誘ってくれ、発表もさせてもらったのだが、学生の積極性に圧倒されたままになっていた。また、2日目に案内してくれた学生の2人は、どちらも日本語を独学で勉強したと聞いて驚いた。私たちは、外国語を習うのは学校で習うのがほとんどで、自分から進んで新たな言語を習得しようとする人はあまりいない。自分で進んで勉強しようとする姿勢は、私は見習わなければならないと痛感した。今回の交流を通して、大学でもただなんとなく過ごすのではなく、まずは、来年のサマースクールに向けて韓国語を頑張ってみようと思いたいと思った。そして、資格や就職に向けて進んで勉強していく姿勢を取りたいと思った。

## (5) 韓国ソウルで感じたこと

中須賀薫

### 1. ソウルの街を歩いて

韓国に着いて1日目は、「美笑」という劇を観賞し、ソウルの街の散策をしました。私がソウルの街について持っていたイメージはドラマからのものでしたが、実際にソウルの街中を歩いてみて、ドラマとは違った印象を受けました。

韓国ドラマから感じたソウルの街は、きれいな街、というものでした。しかし、実際に街を歩いて露天や工事中の建物を目にしたことで、まだまだ発展し続けている街なのだと感じました。夜に街を散策したときには、9時を過ぎても人通りは多く野外ライブを行っていたり活気ある街でした。ドラマで見ていた時よりも親しみやすさを感じました。

### 2. ソウル市立大生との交流

2日目は、ソウル市立大学へ行き、授業見学と学生との交流会がありました。見学した授業は韓国語のみでしたが、ジェスチャーやイラストが使われていたので理解することができました。教室の中の机はコの字型にしてあり、途中で立ち上がり歩きながら授業を行う場面もあり、積極的に参加していく授業で見ていても面白かったです。その後は、ソウル市立大学の学生と発表会を行い、一緒に校内を散策しました。

ソウル市立大学には「夏の香り」というドラマのロケ地になった場所もあるとのことでした。私のグループは、校内散策をした後に時間があるということで、オリニ大公園に行きました。オリニ大公園にはバスに乗って行ったのですが、日本のバスとは乗り方が違い少し戸惑いました。日本のバスは基本的に後ろの扉が乗車口で、前の扉

は降車口になっていますが、韓国ではその逆でした。ドラマの影響で韓国のバスには一度乗ってみたいと思っていたので、嬉しかったです。

オリニ大公園では、公園内にある動物園に行きました。そこで動物を見ながら色々話しました。公園が大学から離れていたため移動に時間がかかり、集合時間には遅れてしまいましたが、楽しかったです。

### 3. 王宮

3 日目もソウル市立大学の学生と行動しました。最初に北村に行きましたが、別々にタクシーに乗ったので、中々会えずしばらく歩きました。北村では韓国の古い街並みを感じられてよかったです。北村は急な坂道が多く歩くのが大変でしたが、韓国の学生と一緒に歩きまわることができて楽しかったです。また、私は韓国ドラマの時代劇も好きなので王宮へいけたのは、楽しかったです。

夕方には、N ソウルタワーへ行きました。ソウルタワーは山の上にあるということで、ソウル市内を見渡すことができました。窪田さんにソウルタワー内にあるトイレの中からもきれいな景色が見られると教わり、トイレにも行ってみました。夕暮れだったので、ソウルタワーから降りるときにはきれいな夕焼けを見ることができました。夜には明洞に行き、4 日目の朝にも行きました。明洞は夜でも朝でも人通りが多く、活気がありました。

### 4. おわりに

私は韓国ドラマから韓国に興味を持ち、今回の交流事業に参加しました。今回韓国に行ったことで、以前よりも韓国を身近に感じるようになりました。また、前よりも韓国について学びたい、韓国語を話せるようになりたいと考えるようにもなりました。ソウル市立大学の学生とはメールのやりとりを続けており、これからも交流を続けていこうと思います。これからも韓国語の勉強を続け、また韓国へ行きたいと思います。

## (6) 食事からみる韓国

秋田 早苗

2011 年 9 月 20 日から 9 月 23 日までのソウル市立大学の学生たちとの交流会に参加して楽しかったが、この中で韓国での食事に関して書いてみようと思う。一日目の夕食はソルガオン (설가온) という韓国伝統飲食店での食事で、韓国伝統料理 (デザート: 油菓) をいただいた。二日目と三日目はソウル市立大学生との食事会で、カルビ、プルコギ、冷麺、マンドゥ、カルグクス、ビビンパ、参鶏湯、チヂミ など多様な韓国の食べ物を味わえる機会をもらって嬉しい経験だった。

## 1. 食事から気づいたこと

### ○食器類について

日本では、木などが原料の箸をつかうのが一般的であるが韓国では鉄のスプーンと箸を主に使用する。また、冷麺や冷たいスープなどがはいていた器も鉄製のものだった。二日目の夕食で食べたカルビは、店の人によって、はさみでカットされた。はさみをつかって肉を切っているのを実際に見ると多少の違和感があったが、焼いた肉を切るのにははさみを使うほうが簡単そうだった。

### ○キムチについて

交流したソウル市立大の学生に聞くと、自宅にはキムチ専用の冷蔵庫があり、家庭でキムチを漬けると教えてくれた。食事のときには、必ずキムチが出された。赤の辛い味付けのキムチはもちろん、白い辛くないキムチもあった。赤のキムチは、辛いのであまり多くは食べることはできなかった。

### ○梅茶（メシルチャ）について

食後に何度か出されたのが、この梅茶である。梅茶には腸をきれいにし、食中毒や下痢を緩和してくれる作用があるそうだ。夏には、よく冷やしたものが好まれ、冷たい梅茶が出された。

### ○油菓（ユガ）について

一日目の夕食のデザートとして出された。穀物と蜜をあわせて油で揚げた菓子であり、韓国の伝統菓子のひとつである。

### ○マッコリについて

マッコリは、韓国の伝統酒で米を主原料としたアルコール発酵飲料である。一日目の夕食ではやかんのような形の入れ物にいれられて出され、三日目の夕食では、器に入ったマッコリをひょうたんですくってコップへ入れる方法だった。店によって異なるようである。一般的に、マッコリは乳酸菌飲料のような酸味と、炭酸発泡が特徴である。

## 2. 韓国での食事から感じたこと

韓国での食事は、かなり量が多くおかずの種類も豊富であった。カルビとプルコギを食べたあとに、冷麺を食べるのが、みんな当たり前のようにしていたことに驚いた。夕食には、必ずビールやマッコリなどのアルコールが出された。マッコリはアルコール度数が高めに感じたので、あまり飲まないようにしていたが、ソウル市立大の学生にマッコリをサイダーで割った「マクサ」を教えてもらい、それはストレートのマッコリよりも飲みやすく感じた。

驚いたことがもうひとつある。それは三日目に訪れたソウルタワーで飲んだホットコーヒーの飲み方である。あたたかい飲み物をストローで飲むと火傷をしてしまうの

で日本ではストローがついていることはない。しかし韓国ではホット専用のストローがある。冷たいものを飲むストローよりも細く飲み物が少しずつしか出ないように作りになっていてあつい飲み物が一気に口に入って火傷してしまわないように作られていた。このストローはごく最近から使われはじめたようだ。空港で、日本など他の国にもあるスターバックスに行ったが、もちろん普通のストローの隣に細いストローが置かれていた。

実際、このストローでホットコーヒーを飲んだが、ゆっくりとコーヒーを飲むことができるので、ソウル市立大の学生とゆっくりと話をすることができて、そのような効果を目的として作られているのではないかもしれないが、会話をする機会ができてよかった。

日本の食事とは違うと感じる点が多かった。ソウル市立大の学生との交流では食事についての話でお互い相違点を話すことができ、会話のきっかけが作れたのでよかったと思う。

## ソウル市立大学校との交流（Ⅱ）

### ソウル市立大学における英語教育、あるいは英語による講義の実態について 吉本和弘

国際交流院のプログラムコーディネーターのジーン・ソン氏、ナミ・キム氏に対して、ソウル市立大学の英語教育についてインタビューした。

学生は入学前に TOEIC700 点レベルに到達している者がほとんどであるという。これが事実ならば根本的に日本の学生とかなり力の差があることが伺える。大学または学部によっては卒業時までには 850 点を取得していないと卒業できない大学、学部もあるという話であった。これらの数字については、確たる資料をもらっていないので、確証を持ってない部分もあるが、韓国の英語教育熱の高さは有名であり、このような数字もあながち間違っていないという気はする。

卒業論文は英文あるいは韓国語で書くということであるが、英文である割合までは情報を得ていない。

それだけの高得点を大学入学前に取るためには、高校までの教育で相当に密度の濃い学習が必要だろうが、高校では特に TOEIC 対策の授業というような授業は行われていないということだ。皆独学、あるいは塾に通って勉強するのだという。そのように軒並み TOEIC 高得点者だとしても、皆が皆、必ずしも英語でのコミュニケーションがとても流暢にできるという訳ではないというのは、韓国国内での英語教育批判の声の中にはよく聞かれることだという。これは TOEIC の試験内容と方法が偏っている部分があるためであろう。また受験勉強として学んだ結果の高得点なので、試験という形式でのみ結果が出せるというような英語力なのかもしれない。

大学における語学としての英語授業は、国際交流院が多くを開講している。ロゼッタ・ストーンという各国語の学習用 e-Learning のシステムが完備しており、学生は誰でも好きなだけこのコンピュータ上のシステムを使って勉強できるという事である。

ソウル市立大学では、学部の授業のうち一定量の講義が英語で行われている。経済系（Business Administration など）や理系科目の多く（Electrical and Computer Engineering, Material Science and Engineering, Physics, Computer Science など）と、文系では主に英米文学関係の専攻学生向けの授業である。社会科学系は少ないということである。カリキュラム表によれば 80 科目以上がオール・イングリッシュで提供されている。

近年、多様な国からの留学生が増加しており、それに伴って英語での授業が増

えているということである。英語授業を行っている教授はネイティブよりも韓国教授の方が多く、そのほとんどが米国で Ph.D を取得した教授であるという。

また、ソウル市立大学からニューヨークの大学へ毎年 30 人程度をインターンシップに派遣しているという。経済関係の教授が現地に人脈を持っていることがそれを可能にしているとのこと。アメリカ企業はアメリカ人学生だけでなく韓国人などの留学生もインターンシップを受け入れることには積極的らしい。内容は、短期間の職業体験（無給）である。例えば本学から交換留学生としてソウル市立大学へ留学した場合、この種の講義を取ることは可能であるということであった。

スケジュール調整の関係で英語担当教授と実際に懇談することはできなかつたし、また実際の英語の講義を見せてもらうこともできなかつたので英語で行われる講義の実像は把握できなかつた。

国際交流院では、韓国語の授業を学生とともに参観させていただいた。非常に活気のある授業で、学生たちは積極的にコミュニケーションのゲームに参加し、自発的に発言していた。教師は非常にうまい教師だという印象を受けた。はっきりとした元気のいい声で、常に学生に話しかける形で指導していた。

現在英文科 2 年に在籍する学生にインタビューする機会を得たが、彼の英語はとても流暢で、よどみなく高度な内容を話すことができた。英文科の授業はすべてが英語で行われる訳ではないが、1 年の時には 4 割から半分くらいが英語で指導されると言っていた。今はすべての授業が英語だそうだ。卒業時には TOEIC900 点が必要条件だとのこと。

別の場所で、たまたま同志社大学からソウル市立大学の英文科に 1 年の交換留学で来ている学生と話す機会を得た。彼に聞くと、彼が受講した英文科向けの講義というのは、「英文学」というタイトルにも関わらず、内容的にはほとんど語学の授業のようだったと話していたが、それはおそらく留学生が多い授業ということでそのようになっていたのではないかと思われる。これは指導者に聞いてみないと分からない。

結局、通常の講義を英語で多く開講しているということで、入学時に英語授業についてゆける英語力が必要であるという状況が、韓国学生の英語力の高さの重要な要素となっている事は明らかである。

# *Report: Visit to the University of Hawaii Hilo and Manoa Campuses*

報告書 ハワイ大学ヒロ校・マノア校訪問

Sept. 19-24 平成 23 年 9 月 19 日～23 日

Steven L. Rosen

## Introduction

At the end of September, 2011, I made a trip to Hawaii for the purpose of further developing our education ties. We currently have an active exchange program with the University of Hawaii, Hilo, on the Big Island. I met with the director of the Global Exchange Center, and staff to investigate the current state of exchange programs, and to learn about new developments in their various programs. The results of that visit are summarized below. Also included is an information sheet about the program at Hilo.

After visiting U.H., Hilo, I traveled to Oahu to visit the University of Manoa, which is a suburb of Honolulu. In the past we sent students every year for short-term (2 week) intensive English study to their Outreach College, which offers non-degree courses in English. The goal was to make a plan for the resumption of such a short-term program. The results are summarized below, and a sample program is included in this report.

## Outline of main results of the trip to the two campuses (Hilo and Manoa):

- 1) Professor Thomas Dewitt of the U.H. Hilo Business Department will require his students to participate with Rosen's-sensei's new blog on globalization. [<http://www.global-visionaries.blogspot.com/>]
- 2) University of Hawaii, Manoa, Outreach College is offering a 2-week intensive English course in mid-September. The cost is about \$8,555 (684,000 yen) for a class of up to 15 students. It is for 30 hours study. Housing would either be homestay or hotel.
- 3) The University of Hawaii, Manoa, Outreach College is offering us a 3-week spring intensive English course (60 hours) starting Feb. 6, 2012The cost is \$850 per student (about 64,000 yen).
- 4) I was informed that students who wanted to study for 2 semesters at the University of Hawaii as regular exchange students could do so if they have over 500 on their TOEFL test.

Detailed Report/詳細報告:

I. Hilo, Island of Hawaii ヒロ〔ハワイ島〕

28) At U.H., Hilo I first met with Ms. Pamela Collins, the director of the English language Institute (ELI) and we discussed various matters. The main topic was my new blog. Ms. Collins felt that it was a useful teaching tool. She suggested that she could promote this blog as a learning tool with the teachers of her advanced reading and writing courses, when we are ready.

She also said that she hoped that the number of students from the Prefectural University of Hiroshima would increase in the future, since we always send them dedicated and serious students.

She gave me orientation on the new technology they are using: teachers are making digital sound files which students upload into their iPhones for study at home. Hilo students have a large amount of homework for all their English classes. The goal of the ELI program is to raise the student's English ability so that they can take regular U.H. courses. The ELI accepts students even with low TOEFL scores.

2) I had extended meetings with Todd Shumway, Director of Center for Global Education and Exchange. He explained the difficulties of sending U.H. students abroad (to Japan), but said that they eagerly welcome students coming to U.H., Hilo. Even students with weak English ability can have the chance to raise their language ability enough to take basic university courses, usually within one semester.

Mr. Shumway also explained that new students often find adapting to life in Hilo difficult but soon make many friends and become very happy with their lives there. Students studying at Hilo from abroad meet students from around the world. U.H. Hilo is one of the most ethnically mixed universities in the world. Also, the island of Hawaii has the world's most active volcano, and a world famous astronomical observatory. Students can visit other areas of historical and natural interest in even swim with dolphins.

I also found out that the University of Hawaii, Hilo has a new budget for

the construction of new dormitories and new programs related to Hawaiian studies. The University is expanding and enrollment is increasing.

3) I had meetings with teachers about my blog- especially with Prof. Thomas Dewitt, professor of Business Studies. He and I discussed how young students at U.H and around the world need to have deeper understanding of global issues, including global economics and business and also political and environmental issues. Dr. DeWitt felt strongly that my blog idea would be a valuable educational tool because its purpose was in harmony with his teaching goals- to get students to think creatively about global problems and possible solutions. He said that he would require his business students to participate in the blog as a way to expand their thinking and understanding about global issues.

5) Other:

I met a Prefectural University of Hiroshima sophomore who is now studying full-time for one year at U.H., Hilo. She is extremely happy and satisfied with her academic and social life at UH Hilo. She gave me a campus tour of the new facilities and new construction areas~ it appears to be a very nice campus with a full range of facilities for students.

II. University of Hawaii, Manoa (Honolulu) campus, Island of Oahu ホノルル (マノア) [オアフ島]

1) I met with Outreach College head of special English program (SEP) for extended meeting about various educational options.

Finally a plan was decided for 2-weeks intensive study of English in mid-September. This program is for only PUH students, however, our students would have extensive interchange communication activities with UH Manoa students. The class size is up to 15 students, maximum. The cost is about 8,500 dollars for each class they make. If more than 15 students attend, then 2 classes will be made. Housing would either be home-stay or hotel.

2) I met with Mrs. Judy Ensing, Program Coordinator for Outreach College, Manoa to discuss spring intensive course. They are offering a 3 week

intensive course starting February 12, 2012 which costs \$850 per student.

- 3) It was suggested to me that students who wanted to study long-term at the University of Hawaii could do so if they have over 500 TOEFL score. I didn't confirm this information, but was told that Darrell Kicker, International Exchange Coordinator at Manoa International Exchange (MIX) is the person to contact to develop such a program in the future.

Additional points:

- Because the yen-dollar exchange rate is so good now (for Japanese), America is an economical place to study.
- Outreach College can provide a document/contract/agreement which shows an affiliation between U.H. Outreach College and our school.

S. Rosen

報告書 ハワイ大学ヒロ校・マノア校訪問

平成 23 年 9 月 19 日～23 日

成果概要

- 1). ハワイ大学ヒロ校ビジネス学部トマス・デウィット教授は、学生たちにグローバル化に関する新しいブログ [<http://www.global-visionaries.blogspot.com/>] に学生たちを参加させることを承諾する意志がある。
- 2). ハワイ大学マノア校アウトリーチ・コレッジは、9 月下旬に 2 週間の英語集中講座（計 30 時間）を開講する。1 クラスの定員は 15 名で、講座費用は約 8500 ドル（64 万 6 千円）である。もし、学生が 15 名参加すれば、一人当たりの費用は約 4 万 3 千円になる。滞在形態はホームステイがホテルのどちらかである。
- 3). ハワイ大学マノア校アウトリーチ・コレッジは 2012 年 2 月 6 日から、3 週間の春期英語集中講座（計 60 時間）も開講する。講座費用は一人当たり 850 ドル（約 6 万 4 千円）である。

- 4). TOEFL のスコアが 500 点以上であれば、ハワイ大学で 2 セメスター（1 年間）学ぶことも可能である。

## 詳細報告

ヒロ〔ハワイ島〕

- 1). ハワイ大学ヒロ校で英語語学学校（English language Institute: ELI）長のパメラ・コリンズさんと面会し、話し合いを行った。主な論題は新しいブログについてである。コリンズさんはブログに関して有益な指導方法とのご意見を持っている。準備が整えば、上級リーディングやライティングコースの先生方と共に、学習ツールとしてブログを進めていくことが出来ると述べた。

勉学に熱心に打ち込む真面目な学生を送っているため、将来的にはハワイ県立大学からの学生数が増加することを望んでいるとも述べた。

教師が作成したデジタルサウンドファイルを学生が学習のために自宅で iPhone へアップロード出来る新技術を教えてくださった。ヒロ校の学生は全ての英語の授業において大量の宿題が出される。ELI プログラムの目的は学生の英語力を高めることであり、ハワイ大学での本科を履修することも出来る。ELI では TOEFL のスコアが低い学生であっても受け入れている。

- 2). トッド・シュンウェイ国際教育交流センター長と会議を行った。ハワイ大学の学生を海外へ送ることの困難さについて説明されたが、ハワイ大学へ学生が来ることは歓迎すると述べた。新入生はヒロでの生活に適応することへしばしば困難さを感じるが、すぐに友人もでき、ヒロでの生活を楽しむようになる。ヒロ校で学んでいる留学生は世界中から集まった学生と出会うことができ、ハワイ大学ヒロ校は世界で最も民族的に混ざり合った大学の一つである。ハワイという島も、世界で最も活動的な火山、世界でも有数の天文台を持っている。生徒は歴史的な場所を訪れたり、ヤイルカと一緒に泳ぐというような自然に対する好奇心を育んだりすることが出来る。

ハワイ大学ヒロ校はハワイ学に関する新しい寮やプログラムを設立するために予算を用意している。ハワイ大学は発展を続け、入学者数も増加している。

- 3). ブログに関する先生方との会議の中で最も重要なものはトマス・デウィット教授とのものであった。ハワイ大学や世界中のどんなに若い学生であっても、グローバル経済やビジネス、政治や環境問題に加えて、グローバル化の問題について

も、より深く理解することが必要である。ブログの目的は、グローバルな問題やそれに対する解決策について学生たちに考えさせるというデウィット氏の教育目的と一致するため、ブログは価値のある教育ツールであると強く感じている。グローバルな問題に関する考えや理解を発展させる方法として、ビジネス学部の生徒がブログに参加させたいと述べた。

#### 4). その他 :

県立広島大学 2 年生山本さんと面談した。彼女は元気な様子で、ハワイ大学ヒロ校での勉強と生活に満足している。私たちは夕食へと出掛けたが、レストランからの帰り道が暗かったために迷子になった。山本さんが案内してくれたため、キャンパスへ無事に戻ることが出来た。

キャンパス内の新しい施設や建物を見学した。学生にとって多種多様な施設があり、とても良いキャンパスであった。

#### ホノルル (マノア) [オアフ島]

##### 1). 様々な教育オプションに関する会議のために特別英語プログラム (special English program: SEP) のアウトリーチ・コレッジ長と面会した。

最終的には、9 月中旬に行われる 2 週間の英語集中講座計画が決定された。このプログラムは県立広島大学学生のためだけのものではなく、ハワイ大学マノア校の学生ともコミュニケーションを図ることが出来る。クラスの定員は最大 15 名までで、講座費用は授業一回当たり 8,500 ドル程度である。もし、15 名以上の生徒が参加する場合は 2 クラスでの講座となる。滞在形態はホームステイかホテルである。

##### 2). アウトリーチ・コレッジでのプログラムコーディネーターのジュディ・エンシングサンと面会する。アウトリーチ・コレッジでは 2012 年 2 月 12 日から 3 週間の英語集中講座を開講する。費用は一人当たり 850 ドルである。

##### 3). TOEFL のスコアが 500 以上の学生であれば、ハワイ大学で長期間学ぶことが出来ると述べた。この情報については確認していないが、マノア国際交流センター (Manoa International Exchange : MIX) 国際交流コーディネーターのダリル・キッカー氏が述べていた。

追加事項：

- 日本人にとってドルとの為替レートがとても良いため、アメリカは学習するために経済的に良い場となっている。
- ハワイ大学アウトリーチ・コレッジと本学との提携を示す、書類／契約／協定を提供できる。

# ハワイ大学マノア校 (UHM) とのパートナーシップに向けて 原 理

本学がハワイ大学マノア校 (UHM) とパートナーになる条件、およびパートナーになった場合のメリットや問題点に関する情報を収集するため、平成 23 年 9 月 20 日から 25 日までハワイを訪問し、ハワイ大学の担当部門、関係者および学外の識者と会談を行った。

## (1)

UHM で他大学とパートナーとなる場合の交渉を担当しているのは Manoa International Exchange (MIX) という部門であり、ダレル・キッカー氏がそのコーディネーターである。キッカー氏と 2 度面談し、下記の情報を得た。

本学が UHM のパートナーになるためには、本学ではなく、ハワイ大学の学部か学科かプログラムが本学と交換留学を行いたいという申請書を提出する必要がある。UHM とパートナー大学は平等に留学生を送りあうことが条件となっている。つまり、UHM から本学に留学する希望を持った学生がいることが想定できることが条件になる。

A student exchange agreement with an overseas university can be proposed by any of the academic units on the UHM campus. Exchange agreements are always based on reciprocity, so the UHM academic unit must confirm that UHM students are willing to go abroad and that these students will benefit from the exchange.

<http://manoa.hawaii.edu/international/mix/>

上記が意味するのは、本学と UHM がパートナーになるためには、本学の学生が UHM に留学するだけでなく、UHM の学生が本学に留学に来ることが前提になっている。また、留学の目的はあくまでも本学で履修できる科目が UHM の学生にとって学術的に価値のあるものである必要があるということである。これには 2 つの問題が考えられる。一つは本学は教員数の少ない大学であり、一つの専門分野に多くの研究者がいる訳ではないので、その分野に関し多くの研究者に接することができる環境ではないということである。もうひとつは本学には英語での授業が少ないことである。つまり、UHM の学生が本学に留学し、ある分野に関し、UHM では受講できないような多くのクラスがあるとは考えにくく、その結果 UHM から留学生が来る可能性は非常に小さいと思われる。

また、パートナーは 5 年ごとに査定が行われ、実績がない場合はパートナーの取り消しが行われる可能性があるということである。

パートナーになれば、お互いの学生が自分の大学に授業料を取め、留学先の大学に

は授業料を納めずに授業に参加できる。ただし、UHMにMIXを通じて留学するためにはTOEFL61点(520点)が必要である。(80点、520点が望ましいとも書いてある。)

2011年9月の時点で、日本の19の大学からMIXを通じてUHMに来ている日本人学生数は26人だということである。普通の留学生の数はこれより遥かに多いということである。

(2)

実際に本学に留学したいと思っている学生がいるかどうかは別にして、本学のためにパートナーの申請をしてくれそうな学部やプログラムを見つける努力の一環として、政治学部、民族学部、「東アジアの言語と文学」の日本語セクションと情報交換の場を持つことができた。面談等において、協力姿勢は見られたものの、それらの学部やプログラムから本学に留学したい学生がいるという情報はなかった。

政治学部	<p>政治学部には22人の先生がいるが、その内6人と面会し、一定の支持は得た。仮に本学が正式に依頼した場合、政治学部での会議で前向きに動いてくれるようである。</p> <p>賛同してくれた人たち：  元学部長 James Dator  面会した時点の学部長 Nevzat Soguk  9月23日の選挙で学部長に選ばれた Deborah Halbert 准教授（面会したのは9月22日であった）  Kate Zhou 教授  Oliver Lee 元教授（既に定年）  木村エヒト准教授（日本人）</p>
民俗学	<p>Ibrahim Aoude 学部長は、もし他に頼るところがなかった場合は前向きに検討すると言ってくれた。実はこの学部は既にNZの大学のためにパートナーの申請をした経験を持っている。</p>
日本語セクション	<p>「東アジアの言語と文学」の「日本語セクション」のケン・イトー部長とは電話で会談を行った。イトー部長はUHMに赴任したばかりでMIXのことを知らないと言っていたが、前向きに考える可能性はあるようであった。エール大学で博士号を取得し、University of Michiganの教授をしていた人であり、日本語が堪能である。</p>

(3)

ここからは主に UHM の外で得た情報である。

UHM が MIX を通じパートナーになっているのは、日本だけでも 19 大学（リストを文末に掲載）ある。その内の多くはかなり偏差値の高い大規模大学である。

広島市立大学と立命館アジアパシフィック大学と白鷗大学はその他の大学に比べ規模が小さかったり、新しい大学であったりである。そこで、この 3 つの大学がどうしてパートナーになれたのかを調べてみた。

広島市立大学	確認はできなかったが、ハワイ大学から留学生を呼び寄せることが難しいと判断したようである。そして、その代わりになるものとして <b>Peace Studies in Hiroshima</b> という約 1 週間のコースを開設し、英語で授業を行っている。これにハワイ大学から学生が 4 名参加すると、1 名が 1 学期留学したのと同じような価値があるであろうということでパートナーとして成立しているということらしい。
立命館アジアパシフィック大学	この大学の教授がハワイを訪れていたので、会談を行った。はっきりしたことは分からなかったが、UHM のパートナーになるための条件を完全に満たしているとはいえないようであった。
白鷗大学	キッカー氏によると、白鷗大学からは一人の留学生が来たことがある。UHM からは二人の学生が白鷗大学に留学をしようとしたことはあるが、結局留学せず、今のところ UHM からの留学生の実績はないようである。つまり、UHM の条件は満たしてはいないということのようである。

上記の 3 大学の例を見ると、パートナーになるのはそんなに簡単なことではないようである。その理由として、日本からは留学生が UHM に行くのに、UHM から留学生が来ない場合、UHM の持ち出しになってしまい、UHM が損をするということになる。キッカー氏はその辺の選考基準に関しては説明してくれなかったが、ハワイにある別の大学の学長の話では、UHM が大学外の組織と契約を結ぶ場合には、大学の **Legal Office** が必ず介入するということである。**Legal Office** は学長の直属になっていて、MIX が承認したものであっても UHM の利益にならないものであるのなら却下する。しかも、かなり厳しい審査をするらしいということである。

結論：

本学が UHM のパートナーになるのは非常に困難であると考えられる。にもかかわらず、上記の 3 つの大学はパートナーになっているのであり、いろいろな種類の努力をすれば、パートナーになれる可能性がないわけではないようである。

UHM のパートナーになっている日本の大学

- [Aichi University](#)
- [Akita International University](#)
- [Doshisha University](#)
- [Hakuoh University](#)
- [Hiroshima University](#)
- [Hiroshima City University](#)
- [Hokkaido University](#)
- [Kanazawa Institute of Technology](#)
- [Kansai University](#)
- [Keio University](#)
- [Kyoto University](#)
- [Nanzan University](#)
- [Nihon University](#)
  - [Humanities and Sciences](#)
  - [Economics](#)
- [Osaka University of Economics and Law](#)
- [Ritsumeikan Asia Pacific University](#)
- [Ryukoku University](#)
- [University of the Ryukyus](#)
- [Sophia University](#)
- [Taisho University](#)
- [Waseda University](#)

県立広島大学 2週間特別英語プログラム スケジュール (30時間) 一サンプル

国際アウトリーチ カレッジプログラムーハワイ大学マノア校 2012年 3月19日~3月29日

土曜日	日曜日	月曜日	火曜日	水曜日	木曜日	金曜日	土曜日
3/17	3/18	3/19	3/20	3/21	3/22	3/23	
日本出発 ホノルル 到着	ホームステ イ スタート	9:30~12:30 英語研修 UH (3時間)	9:30~12:30 英語研修 UH (3時間)	9:30~12:30 英語研修 UH (3時間)	9:30~12:30 英語研修 UH (3時間)	9:30~12:30 英語研修 UH (3時間)	
3/24	3/25	3/26	3/27	3/28	3/29	3/30	3/31
学外活動	自由研修	9:30~12:30 英語研修 UH (3時間)	9:30~12:30 英語研修 UH (3時間)	9:30~12:30 英語研修 UH (3時間)	9:30~12:30 英語研修 UH (3時間)	ホノルル空港出発	日本到着

# TOEIC,TOEFL 試験の結果分析

2011 年度 TOEIC-IP および TOEFL-ITP 学内実施試験の結果について

吉本和弘、西原貴之

## < 概要 >

人間文化学部では国際文化学科の学生を中心に、英語力の指標となる TOEIC-IP と TOEFL-ITP の各試験を受験するよう推奨している。2011 年度は学部プロジェクトの一環として、これらの試験を学内で実施し、受験者には受験のための費用を全額補助することにより学生の受験を促した。TOEIC-IP 受験の奨励は、国際文化学科の学生の英語学習の意欲を高めるため、また、自己の実力を測り以後の学習計画に役立てるためでもある。TOEFL-ITP の得点は海外（特にアメリカとカナダ）への留学希望者には応募に際して必要とされる試験であり、留学を促進するためには重要な試験である。異文化コミュニケーション能力・外国語運用能力の向上を目的として、2011 年度は TOEIC 計四回、TOEFL 計二回を実施予定であるが、そのうちの TOEIC 三回目、TOEFL 二回目までの結果について考察した。

## < 受験者数について >

TOEIC-IP では、第一回目は 6 月 25 日に実施し、51 名（1 年生 10 名、2 年生 32 名、3 年生 8 名、4 年生 1 名）が受験した。

第二回目は 8 月 2 日実施し、41 名（1 年生 0、2 年生 19 名、3 年生 22 名、4 年生 0）が受験した。

第三回目は 11 月 23 日に実施し、59 名（1 年生 29 名、2 年生 9 名、3 年生 15 名、4 年生 6 名）が受験した。

TOEFL-ITP については、8 月 11 日実施の受験者数が 7 名、11 月 23 日実施の受験者数が 9 名であった。

2009 年度には 1 年生の学生全員に TOEIC-IP の受験を課したが、2011 年度は希望者のみの受験とした。その結果、受験料の補助制度があったにも関わらず受験者数は期待したほどの数に至らなかった。その理由は主に試験実施の日程や時間によるものと思われる。特に第二回目の 8 月 2 日は前期試験の直前の週末ということで、初めての試験の準備に追われていた 1 年生は受験者数が 0 であったことは残念である。

まず、TOEIC の受験者全体および学年ごとの平均点と標準偏差を算出した。結果は以下の表の通りである。

< TOEIC の平均と標準偏差 >

テスト	学年	合計		リスニング		リーディング	
		平均	標準偏差	平均	標準偏差	平均	標準偏差
TOEIC①	全体	547.3	123.7	298.0	64.0	249.2	67.4
	4年	475.0	n/a	280.0	n/a	195.0	n/a
	3年	650.6	155.1	357.5	70.3	293.1	86.4
	2年	540.6	106.8	293.1	60.7	247.5	56.1
	1年	493.0	116.1	268.0	44.3	225.0	76.8
TOEIC②	全体	561.3	95.9	309.4	43.7	252.0	61.2
	4年	n/a	n/a	n/a	n/a	n/a	n/a
	3年	551.6	120.6	306.4	53.8	245.2	73.4
	2年	572.6	56.7	312.9	29.3	259.7	43.7
	1年	n/a	n/a	n/a	n/a	n/a	n/a
TOEIC③	全体	520.1	128.0	293.1	68.3	226.9	67.2
	4年	581.7	199.0	339.2	121.8	242.5	93.3
	3年	544.0	95.0	304.0	51.6	240.0	55.3
	2年	600.0	122.8	328.9	56.6	271.1	68.4
	1年	470.2	111.0	266.9	56.0	203.3	60.0

(小数点第二位以下は四捨五入)

データの数が少なく、受験者の質もその回ごとに異なっているという事実を踏まえた上でこの表から言えることは、やはり学生はリーディングをリスニングよりも苦手としているということであろう。また、2年生は他の学年よりも英語力が高い傾向がうかがえる。

また標準偏差の値からは、やはり国際文化学科の名のもとに学生が集まってはいるけれども、その英語力は均質ではなく、かなりばらつきがある、と言える。

< 2011 年度 TOEIC-IP 学内実施試験を複数回受験した全学生の得点経緯 >

今年度は学内実施の TOEIC-IP テストは、希望者に対して費用を大学が負担して実施したため、あまり受験準備をせず、自分の実力を把握しようとして受験した学生もいたものと考えられる。また、受験者総数も受験者の学年、英語力のレベルもまちまちであり、三回の実施の結果を相互比較する事にはあまり意味はないと考えられるが、その中でも、二回あるいは三回の複数受験をした学生は存在した。そのような学生は

基本的に学習意欲の高い学生だと考えられるが、彼らの得点経緯をみてみよう。

1年生の場合、二回目を受験したものはゼロであった。これは実施日が前期試験直前という時期であったため、本来の授業の試験準備のため受験を敬遠したと考えられる。三回とも受験した者は2名しかいない。三回のうち二回受験した者は21名いた。

表内の点数は総得点およびそれぞれの（リスニング得点／リーディング得点）を表す。

28 (6月25日)	② (8月2日)	③ (11月23日)	得点の増減
< 1年 >			
525 (280/245)		465 (255/210)	-60 (-25/ -35)
395 (250/145)		400 (255/145)	+5 (+5 / 0)
335 (190/145)		185 (130/55)	-150 (-60/ -90)
355 (205/150)		430 (230/200)	+75 (+25/ +50)
< 2年 >			
610 (340/270)	665 (365/300)		+55 (+25/ +30)
555 (325/230)	480 (255/225)		-75 (-70 / -5)
515 (285/230)	545 (295/250)		+30 (+10/ +20)
545 (310/235)	570 (310/260)		+25 (0 / +25)
	525 (305/220)	465 (275/190)	-60 (-30 /-30)
	615 (325/290)	630 (355/275)	+15 (+30 /-15)
	545 (325/220)	640 (330/310)	+95 (+5 / +90)
600 (280/320)		760 (395/365)	+160 (+105/ +45)
470 (275/195)		595 (335/260)	+125 (+60 / +65)
550 (355/195)	565 (310/255)	645 (365/280)	+95 (+10 / +85)
< 3年 >			
860 (450/410)	790 (420/370)		-70 (-30/ -40)
635 (345/290)	695 (380/315)		+60 (+35 / +25)
	460 (245/215)	455 (245/210)	-5 (0 / -5)
	595 (360/235)	625 (365/260)	+30 (+5 / +25)
	445 (290/155)	360 (205/155)	-85 (-85 / 0 )
	610 (330/280)	585 (360/225)	-25 (+30 / -55)
	615 (335/280)	650 (375/275)	+35 (+40 / -5)
	625 (335/290)	580 (305/275)	-45 (-30/ -15)
655 (375/280)	750 (380/370)	650 (375/275)	+95 (+5 / +90)

<得点の増減について>

1年生で複数受験した学生の成績は、二回目に向上したのもあれば下がったものもある。増減の幅も+5点から-150点まで様々である。

2年生は二回、または三回受験した学生の多くが得点を伸ばしていると言えるだろう。最大160点伸びた学生もおり、伸びた学生だけに限れば、伸び幅の平均は75点となっている。

3年生の場合、複数受験者は全体的に600点前後をすでに取っている意欲ある学生たちと言えるが、高得点者の中に点数を下げた学生が何人いることが分かる。複数受験者の半数以上が得点を下げているという事実も気がかりである。

また、これを全体的にみた場合、

(1) 複数受験により、得点を伸ばした学生(14名)の方が、得点を下げた学生(9名)よりも多かった

(2) 各技能別に比べると、リスニングで得点を伸ばした学生(14名)の方がリーディングで得点を伸ばした学生(11名)よりも多かった

(3) リスニングで得点を下げた学生(7名)よりも、リーディングで得点を下げた学生(9名)の方が多かった

などが指摘できる。

これらの事実から、統計学的には有意性はあまりないとはいえ、複数受験する事はやはり少しでも得点を上げることにつながっているという事は言えるであろう。

またリスニングの得点を伸ばすことは多くの学生ができていますが、リーディングの得点を伸ばすことができていないということが言えるであろう。問題数が多いことがTOEIC試験の一つの特徴であるとすれば、回答時間にあまり差がないリスニングに比べ、特にリーディング問題において、素早い回答、すなわち速読ができるかどうかによって差がでていた事が伺える。実際、リーディングで得点を下げたものは、回答時間が足りなくなってすべての設問に答えられていなかった、あるいは長時間の集中力の持続ができなかったのではないかという印象がある。だとすれば、やはりリーディング力、特に速読力の強化が望まれるという事が言えるであろう。

その意味では、制限時間内に多くの問題に回答しなければならないTOEICテストの受験が、リーディングの強化の必要性を認識させるためには一つの動機付けになるだろうと考えられる。

<TOEFL テストの得点の平均と標準偏差>

テスト	I		II		III		合計	
	平均	標準偏差	平均	標準偏差	平均	標準偏差	平均	標準偏差
TOEFL①	48.0	5.0	47.0	3.0	50.0	5.0	483.0	36.0
TOEFL②	47.0	2.0	46.0	4.0	47.0	4.0	464.0	28.0

TOEFL の場合、受験生が少なかったため、学年別の数値は省略し、受験者全体の平均値と標準偏差のみ示しておくに留めたい。

## 2011 年度 韓国語能力試験の結果分析

チョン ウテク (鄭遇澤)

韓国語能力試験は、大韓民国教育科学技術部が認定している韓国語能力に関する試験であり、大韓民国教育科学技術部・国立国際教育院(NIIED)が主催する試験で、日本では駐日本国大韓民国大使館と財団法人韓国教育財団の後援で行っている。韓国語の教育評価を標準化し、韓国語を母語としない韓国語学習者に学習方法を提示するとともに、韓国語の普及や、試験結果の学習・留学・就職等への活用などを目的に、世界 35 カ国で一斉に実施されている。韓国教育財団は、日本での試験実施を主管している。

2006 年度から試験問題が、従来の 1～6 級の 6 種類より初級・中級・高級の 3 種類へと絞り込まれ、成績に応じて等級が振り分けられるシステムに変わった。

韓国語能力試験は、韓国文化の理解及び留学などに必要な能力の測定・評価を目的とする。受験資格は特にはない。級の選択は、初級(1・2 級)・中級(3・4 級)・高級(5・6 級)の 3 つから選択する。級別の認定基準、問題の種類及び配点(4 つの分類)、合格基準は以下のように分けられている。

初級試験	1 級	自己紹介、買い物、飲食店での注文など生活に必要な基礎的な言語を駆使でき、身近な話題の内容を理解、表現できる。800 語程度の基礎的な語彙と基本文法を理解でき、簡単な文章を作れる。
	2 級	電話やお願い程度の日常生活に必要な言語や、郵便局、銀行などの公共機関での会話ができる。1,500～2,000 語程度の語彙を用いた文章を理解でき、使用できる。
中級試験	3 級	日常生活を問題なく過ごせ、様々な公共施設の利用や社会的関係を維持するための言語使用が可能。文章語と口語の基本的な特性を区分し理解、使用が可能。
	4 級	ニュースや新聞をある程度理解でき、一般業務に必要な言語が使用可能。よく使われる慣用句や代表的な韓国文化に対する理解を基に社会・文化的な内容の文章を理解でき、使用可能。
高級試験	5 級	専門分野における研究や業務に必要な言語をある程度理解でき使用可能。

	6 級	政治・経済など全般的なテーマにおいて不便なく利用可能。 ネイティブ程度までではないが自己表現に問題なく話す事が可能。
--	--------	---

△問題の種類及び配点（4つの分類）

1 時間目		2 時間目		
語彙・文法	書き取り (作文あり)		聞き取り	読解
4 択	4 択	筆記	4 択	4 択
100 点	40 点	60 点	100 点	100 点

△合格基準

試験領域（語彙・文法・書き取り・聞き取り）のいずれにも落第点がなく、それら全領域の合計点が及第点に達した者をその級の合格者とする。

試験区分	評価等級	及第点（4分野の合計）	落第点（分野別の点数）
初級試験	1 級	200 点以上	40 点未満
	2 級	281 点以上	50 点未満
中級試験	3 級	200 点以上	40 点未満
	4 級	281 点以上	50 点未満
高級試験	5 級	200 点以上	40 点未満
	6 級	281 点以上	50 点未満

今回受けた試験は第21回目の試験で、2011年9月18日（土曜日）、広島市内の崇徳高校で行った。県立広島大学生のべ19人（学部18人（初級17人、中級1人）、院生1人（高級））が申請して、16人が応じて、3人（初級）は体調不良などで欠試した。試験の結果は12月初に通知された。

△ 最近3回の試験の結果を以下の表で示す。

	初級			中級			高級			総計		
	志願者 数 受験者 数	合 格 者	合 格 率									
16 回 (09)	2050 1718	1380	80.3	2174 1774	998	56.3	1424 1194	554	46.4	5648 4686	2932	62.6
18 回 (10)	1640 1336	1129	84.5	1926 1551	830	53.5	1265 993	417	42.0	4831 3880	2376	61.2
19 回 (10)	2470 1946	1574	80.9	2370 1834	768	41.9	1481 1165	372	31.9	6321 4945	2714	54.9

△ 県立広島大生の受験結果は以下のとおり。

	初級			中級			高級			総計		
	志願者 数 受験者 数	合 格 者	合 格 率									
21 回	17 14	7	50	1 1	1	100	1 1	0	0	19 16	9	56.2

△試験領域別の平均表（初級のみ）

	語彙・文法	書く（作文）	聞く	読む
合格（2級） （4人）	91.5	91.3	87.3	92.8
合格（1級） （3人）	58.3	60.3	66.3	57
不合格 （7人）	45	24.4	47.3	28.6

### 分析と次期の受験のための対策

今回の試験結果からみると、不合格の場合、4領域の中で、＜1語彙と文法＞と＜3聞く＞領域より、＜2書く＞と＜4読む＞領域が相当低い。これはやや意外な結果と思われるが、文字や単語を覚え、簡単な会話を修得することに時間を割いている初級では、文章を読んだり作文を書いたりする作業が多くはない。今回の初級受験者のほとんどが、一学期間の授業のみを履修して受験したので、4領域すべてを均等に修得するのはやや難しかったのかもしれない。今後は、基本的な読み書き能力の教授を含めて、韓国語学習の楽しさがさらに高まり、検定試験の客観的尺度による理解度の把握の大切さが尊重され活用されるよう、取り組みたい。また、2年生3年生の段階で中級以上を受験する学生数を増やし、その結果を次回の分析に役立てるよう企画したい。

## 中国語検定試験の結果分析

丸 山 浩 明

中国語検定試験（略称：中検）は、毎回平均2万人ほどが受験する日本国内では最もポピュラーな中国語の学習到達度を測るための資格試験である。中国政府が主催する漢語水平考試（通称：HSK 漢語水準試験）が、中国国内の大学入学水準を測る目的で、1級から6級へ昇順制であるのに対し、英語検定試験などと同様に準4級から1級へと6段階の階梯を設定している。

本学での中国語学習（国際文化学科）の現状から言えば、中国語検定では1年間の学習修了者が4級を、2年間（週2コマ）の学習修了者が3級を目指すことが基本と考えられる。しかし、例えば大学入学後4月に学習を開始し、1年間修了した春3月の試験であっても4級に合格するにはかなりの自習を加えないと特に語彙の面では追いつけない。また、ここ数年の長期留学経験者（1年間の語学留学）の実績を見ると、漢語水平考試（HSK）では、中国の大学の学部入学基準の6級を取得して帰国する場合がほとんどであるが、中国語検定試験となると3級の上の2級の取得はかなり難しい。

このプロジェクトでは定点観測の意味を込め、一昨年の秋季に実施された第69回の試験を引き継ぐ形で、同時期に当たる本年秋季に実施された第75回中国語検定試験の学内受験者の結果分析を行うものである。（なお、第69回については『国際交流の促進と国際コミュニケーション能力向上のための調査・研究』報告書 平成22年3月発行 p122-123を参照。）

第75回の試験結果を4級・3級に限って示すと以下の通りである。

	4 級		3 級	
合格基準点	リ 60	筆 60	リ 65	筆 65
平均点	59.8	66.3	64.7	59.0
受験者数	7,478		7,693	
合格者数	3,480		2,416	
合格率	46.5%		31.4%	

（リ：リスニング、筆：筆記）

本学の平均点	75.5	72.1	60.5	56.7
--------	------	------	------	------

これより明らかなように、4級においてはリスニングの基準点（60）全国平均点（59.8）及び筆記の基準点（60）全国平均点（66.3）を本学の平均点（75.5、72.1）はともに上回っている。それでも、全員が合格するわけではない。一昨年の調査で懸念された4級リスニングに見られた克服すべき難易度はやや緩和されたかと思われる

ものの、全国平均点や合格率から考えると、やはりリスニングの試験の成否が合格を左右するようである。本学学生の結果を見ても、特に語彙・単語の理解に課題がありそうである。したがって、CDなど音声教材を活用した音声復元とともに理論的に音声を漢字表記できてその意味がわかるような「発音表記と漢字表記と意味」の結びつきを増やさないと、リスニングの基礎固めが出来ない。これは筆記の基礎にも関係する分野なので、語学の基本に立ち返って復習を重ねることが大切であろう。

次に3級については、リスニングにおいても筆記においても、本学の平均点は合格基準点、全国平均点に対して下回っている。そのため、ほとんど合格していない。一昨年懸念された極端な難易度引き上げはほぼ元の状態に戻され、合格率も全国約30%台に回復したものの、3級の合否が中国語学習において大きな壁の意味を為している点は相変わらず確認できる。本学の学生の結果から見ると、語彙発音や文法の理解はそこそこ達成されているものの、作文の分野の学習は以前より後退していると判断できる。日常よく用いられる表現や多くの決まり文句をどれだけ習得しているかで差がつくため、ドリル形式などを活用して、語彙の入れ替えを繰り返し練習するとよいだろう。

今後の目標としては、大学入学後初修であっても2年間で基本的な到達度である3級合格がまずは大切になろう。中国語学習のモチベーションを維持しながら学内受験者全員が中検3級を突破し、さらに3年次以降も研鑽を継続して2級合格者が毎年複数生まれるよう教育的配慮と支援を続けて行かなくてはなるまい。

また、このような調査・研究は、プロジェクトでの対象となるか否かに拘わらず、毎年定期的に機会が確保されればありがたい。今後も中国語検定試験の信頼性・妥当性が担保され、学習の到達度を測る目的で大学の語学教育の指標ともなり得るよう活用できることを願ってやまない。

# International Theatre Company London (ITCL)による演劇ワークショップと舞台公演『デイヴィッド・コパフィールド』

吉本和弘

## 概要

人間文化学部・重点研究学部プロジェクトの研究テーマである「異文化コミュニケーション能力向上に関する研究」の一環として、英国のプロフェッショナルの劇団 International Theatre Company London (ITCL)とその演出家を招き、演劇ワークショップを小体育館にて、またその後、英語劇『デイヴィッド・コパフィールド』の公演を体育館の特設ステージにて実施した。

ITCL は英国ロンドンを拠点として海外公演ツアーを毎年行っている小規模な劇団である。今回、学部プロジェクトで異文化コミュニケーションのためのワークショップを実施するにあたり、主催してくれる個人または団体を探す過程で、毎年春に広島女学院大学で公演を行っている ITCL を候補として挙げた。そのエージェントである在東京の株式会社アシュリー・アソシエイツに問い合わせた結果、当年のツアー日程でまだ11月分に若干の空きがあるという状況であったので、学部として契約を交わし、実行の運びとなった。

ITCL 演出家によるワークショップは、演劇的な手法による効果的なコミュニケーションについて学ぶ内容である。ワークショップは本学学生対象として、劇公演の前の時間帯に90分間行い、34名の参加があった。

一方、劇の公演は、本学の地域貢献の意味もあって、一般公開して外部からの聴衆を無料で受け入れることとし、体育館のステージを舞台とし椅子を並べることで観客席を確保した。会場の設営には前日および当日、教職員と学生が当たった。宣伝活動として、ひと月ほど前に、本学入学実績のある近隣の高校30校に大ポスターとチラシおよび案内状を発送し参加を呼びかけた。また学内にもポスターを貼り、また多くの授業内でワークショップへの参加と劇公演の鑑賞を呼びかけた。ホームページにも案内を出したが、その周知期間は一週間程度に留まった。結果として、雨天にも関わらず、本学学生だけでなく、高校生、近隣の一般人を含め、200名を超える観衆を集めることができ、公演に対する評価も概して高かった。

## 演劇ワークショップ

ITCL 専属の演出家ポール・ステビンズ (Paul Stebbings) 氏に依頼して演劇ワークショップを開催した。11月18日(金曜日)14時20分開始で90分間行われた。場所

は小体育館を使用した。学生に効果的な自己表現の方法について実際に体験しながら学んでもらうことを目的としていたので、本学在学学生から参加希望者を募り、結果的には全学年にわたり 34 名の参加者があった。

体全体を使ってじゃんけんをして、勝った喜びや負けた悲しみを表現するゲームや、目隠しをされたパートナーに限られた単語だけを使って指示を与えてボールを追わせるゲームなど、興味深い活動を楽しんだ。すべて英語での指導で行われたが、指導の意図はむしろ言葉以外の表現力を養う事にあり、言葉を使わずに自分の意図や感情を明瞭に表現することを目標とした。キーワードは‘make it clear’である。体の動かし方や感情表現、声の調子などによって、いかに自分の意志を明確化し、相手に伝えるかがテーマである。そのような活動に慣れていない日本人としては新鮮な体験だったと思われる。実は言語以外の様々な身体表現が、コミュニケーションにおいて非常に重要な意味を持つことをこのワークショップを通じて学んでくれたものと期待できる。それにより国際的なコミュニケーションの場においても、言語だけに頼らない総合的な表現によるコミュニケーションの重要であることに気づいてくれたものと確信する。

#### <学生の感想>

ポール氏は三つのゲームを通じて、体と言葉を使って人に何かを伝える方法と大切さを教えてくれた。一つ目は、参加者全員で円になって隣の人に“Zip!”と言いながらどンドンまわしてゆくもの。時には“Bump!”と言って逆回りにしたり、二つの箇所から同時進行で始まったりしていった。つまずいた人から罰ゲームがあった。二つ目にジェスチャーで行うじゃんけんをした。グループ戦で行い、巨人は小人に勝ち、小人は魔法使いに勝ち、魔法使いは巨人に勝つというルールだ。勝ったチームは負けたチームを追いかけて捕まえることができる。最後に Blind football をした。ボールはなかったので黒板消しをボールの代わりにして Player は Controller の指示に従い黒板消しを探し当て、ゴールである椅子に置くというゲームだ。・・・目隠しをすると、誰の声か判断できなくなり、指示も分かりにくかった。普段なら伝えるという行為には聴覚だけが必要なように思うが、視覚も十分コミュニケーションにおいて役割を果たしていることを実感できた。・・・指導をしてくれたポール氏が「人に気持ちや状況を伝える時に曖昧な表現をしてはいけない。演劇でも会話でも相手にはっきりと伝えないと成立しないんだ」ということを言っていたのがとても印象的で、その通りだと納得した。(国際文化学科 2 年女)



## 原作についての特別授業

チャールズ・ディケンズの原作『デイヴィッド・コパフィールド』は長編小説であり、これを読んでいる学生は少ないと思われる。多少の知識がある方が、観劇に際しても理解が深まることが予想できたので、原作についての特別講義を企画した。国際文化学科の天野みゆき教授により、作品の概要を解説する約一時間の講義を講演直前に行った。天野教授の授業の受講生を中心に30名程度の参加者があった。

### <特別講義についての学生の感想>

天野先生の授業で『デイヴィッド・コパフィールド』のある章を読んだ。それは成長したデイヴィッドがペゴディ家を訪問するシーンであったが、配役上の問題なのか、劇の上演時間の問題なのか、エミリーの婚約者のハムやロウのさいおばさんといった原作の登場人物が劇では出ていなかった。それでも話の筋が通っていて、なおかつ音楽や歌でミュージカル調になっており話に入り込みやすく面白いと思った。また本で一節を読んだ際にはデイヴィッドはすごく冷静で物事を客観的に見ることができるといった人物像をイメージしていたが劇では成長しても子供じみた振る舞いをしてさらに友人にもだまされたりするほど純粋である印象を受けた。この違いがとても印象的で『デイヴィッド・コパフィールド』の原作を一通り読んでみたいと思うことができた。

印象に残った台詞が二つほどある。一つは「魚は願い事を叶えてくれるのよ」と言う台詞である。これは英語で fish と wish が韻を踏んでいて響きが良いのと同時に、海辺に住むペゴディ家らしい発想だと感じた。またデイヴィッドがドーラという女優に恋した時に“Adorable Dora” 「ドーラに夢中だ」という台詞があった。これも韻を踏んでおり、マザーグースの歌詞でもそうであったように、英語の詩の構造方法を感じ取ることができて面白いと感じた。(国際文化学科2年女)

## 英語劇公演

英語劇『デイヴィッド・コパフィールド』は体育館のステージを使って上演された。上演時間は休憩を入れて約130分である。チャールズ・ディケンズ作の長編小説を演出家のステビンズ氏が演劇用に脚本化した作品である。『デイヴィッド・コパフィールド』を舞台公演すること自体が非常に珍しいことであり、ヴィクトリア朝時代のイギリスの庶民の生活や文化を知ることができるだけでなく、英文学史上でも重視されている文学作品を本場の役者が生の英語で演じる様子を間近で見ることができる貴重な機会となった。

すべて英語で演じられるため、理解することが難しい聴衆も多いことを想定し、舞台の左右に日本語字幕が投影され理解を助けた。字幕は役者の言葉と一致するように操作された。役者は5人しかいないので一人で何人もの人物を演じ分けた。舞台装置にそれほど凝らない分、役者の衣装の早変わりや、音楽を自前で演奏したり歌ったりして、役者の技量の高さを証明していた。幕を使用しないため、幕によって場面を変えることはないにも関わらず、多くの場面を流れるように展開してゆく形であった。これは脚本の出来の良さを証明するものでもある。

ディケンズの原作とは一部異なる部分もあるが、原作の内容を非常に効果的に舞台演劇に変換しており、聴衆にも分かりやすい展開になっていた。役者は観客を楽しませるために、歌や踊りで盛り上げたり、客席に入り込んで演技したり、観客を利用したりして様々な工夫を凝らしていた。また体育館という音響的に言って非常にやりにくい（音が反響してしまう、また客席と舞台の位置関係が本当の劇場とは大きく異なる）状況であったにも関わらず、その点も考慮したと思われる発声を心がけていたと思われ、十二分に観客を魅了してくれた。

### <舞台を鑑賞した学生の感想>

全体を通しての感想としては、音響効果が決して良いとは言えない体育館という環境であったが、幸運なことに前から2列目で鑑賞することができた。そして役者たちのすばらしい透き通った声を聞くことが可能であった。また、公演は2時間にわたって行われたが、少しも退屈することなく鑑賞することができた。一番大きな要因としては、ただの演劇なのではなく、歌や踊り、楽器の演奏など見ていて飽きないという点が考えられる。観客をくすっと笑わせるような演出も多く、観客のことをきちんと考えて楽しませようとしているのがよくわかった。中でも印象的で面白かったのは、酒で失敗したデイヴィッドがもう酒なんか飲まないと言った場面である。その両脇で酒の瓶の格好をした女性がそんなの無理だと言わんばかりにデイヴィッドにまくしたてる。私の中に、人間がお酒の衣装を着てお酒になるという発想がなかったのでは

ても変わっていて面白いと感じた。幼稚園の劇の際に木や花という人間ではないものになったことがあるのを思い出し少し懐かしくもなった。英語劇であるため、やはり字幕を見なければ内容を理解することが少し困難であった。それでも、言語が違ってこのように人々を楽しませることができるということは非常に素晴らしいことだと思う。個人的にもう少し英語を勉強して字幕なしでも理解できるようになりたいと感じた。(国際文化学科 1 年女)

劇を見る前に、登場人物やあらすじを読んでいたのですが、内容が少し違うことに最初戸惑いました。原作が超大作で 2 時間半では演じられないから削られているのだろうと思いましたが、それでも楽しめました。・・・普段、英語の映画を見る時や音楽を聴く時とか、英語が全然聞き取れず、字幕や英語の歌詞がなければ内容が分からないくらいなのですが、映画を見るよりだいぶ聞きやすかったです。演劇で大きな声ではっきりと言わなければいけないからかなと思いました。途中の詩的な表現や歌以外は字幕に頼らなくても何となく内容がわかったので一層楽しかったです。

どの役者も楽器が演奏できて役割に無駄がないな、と思いました。5 人で演じているとは思えないほど質が高かったと思います。特にクレアラ・ペゴティ、ジェイン・マードストーン、ドーラ・スペンローの役を演じているのが、同じ人だと思えないくらいに役に徹していたのが印象深かったです。楽器を練習して、複数の役をこなして、歌を歌って、踊りの練習をして、普段どれだけの時間を練習に費やしているのかなと思いました。途中、かくれんぼをしたり、観客に瓶を渡したり、酔っているのかと質問したり、観客と一体になるような空気を作っているのも面白かったです。瓶の姿で歌って踊っている姿や、魚で叩いている場面も面白かったです。また、舞台には少しの小物しか置いてなかったけど、家から浜辺、ロンドンなどに場面が移動しても、すぐにその場面の雰囲気が出せていることも印象的でした。

紳士やレディー、魚売りの娘、といった階級を思わせるところが全体的に多く、そこでイギリス文化を感じました。・・・服なども昔のイギリスを思わせるもので、視覚的にも楽しかったです。(国際文化学科 2 年女)

・・・英語劇を生で見るとは初めてだった。・・・英語を聞き取れるわけではないので字幕を見なければならぬのだが、歌の迫力や細かい表情や全体の雰囲気などは言葉以上の伝達力があると感じた。生で見るとの意義をここに感じた。印象に残ったのは、犬のような着ぐるみを着て出てくるコミカルなシーンだ。よく見ると犬役の人の表情が犬の表情をすごく意識していることがわかった。注意して見なければ着ぐるみの中の表情は見えないのだけれど、そういった細部にまで手を抜いていない様子に感動した。・・・役者さんがクラリネットやアコーディオン、バイオリンを演奏し、そ

れで立派な BGM や歌を作り出していたことに感動した。一人で二役も三役もこなしてとても少人数で作上げた舞台だとは信じられないような作品であった。生で見ることでそこから多くのことを感じる事ができたので、とてもいい経験になった。(国際文化学科 2 年女)

まず最初に、残念に思ったことから述べようと思う。せっかくの素晴らしい演技だということに会場(舞台)があまり良くなかったのがとても残念に思った。雑音が邪魔をして舞台に集中するのに非常に邪魔になった。5 限目を終了するチャイムが聞こえ、消防署のサイレンが聞こえた。ほかにも小さい子供の親に質問する声などが邪魔で仕方がなかった。・・・特に舞台では関係のない音が入ると雰囲気をおちこわしにするため、気をつけなければいけないと思う。そういう配慮の足りなさが残念に思った。・・・たいていの舞台では「未就学児の入場はご遠慮ください」とある。この舞台はお金は取っていないし、無料でプロのしかも海外のものを見られるとても良い機会だとは思いますが、ただでさえ小さい子供には舞台というのは理解できるものではないのに英語で芝居をしているのだから到底理解できるはずがない。それにも関わらず連れてくるのは少しマナーとしてどうなのかと思った。・・・せっかくこの大学に来てくださったのに環境の良くない会場でやってもらったのがなんだか申し訳なく思ってしまったのが一番だった。

・・・今回、生で演劇を鑑賞したことで、役者の技術の素晴らしさ、そして演劇に引き込まれる感覚を味わうことができた。これは生で観ないとわからないことだと思うので、これからの生で演劇を鑑賞していきたいと思う。(国際文化学科 4 年女)

今回、中国新聞の 11 月 28 日付けの企画「キャンパス：リポーター発」において、このたびの公演についての記事が掲載された。見出しは「英語劇で感情を表現：コミュニケーション再考」という 350 字程度の記事である。本学 4 年生の松井祐介くんが記事を書き、ワークショップの内容を中心に写真とともに報告した。

## 実施に関する反省点

劇団を招聘して公演を行うという経験は初めてのことであったので、実施に至るまでにはいろいろと問題もあった。今回招聘した ITCL は学校関係での上演の経験が豊富な劇団であり、設備の十分はない環境での上演を得意とするという特徴を持っていたので、主催者としてもとてもやりやすかった。しかし依頼した時期が遅く、彼らの日本ツアーの最後に当たる日にしか空きがなかったため、今回の日程には選択の余地がほぼなかったと言える。本学キャンパスで実施し、観客としては主に学生を想定して

いたので、授業のある日の午後で、あまり授業のない時間帯という必要条件があったのだが、結局は ITCL 側が合わせてくれることになりなんとか日程調整ができた。もっと早期に依頼をすることができればより良い日程選択ができたかもしれない。

今回無料で一般公開とし、地域貢献にも寄与したいという観点から、近隣の高等学校約 30 校に案内を出したが、結果的には高校生は十数名程度の来場にとどまった。また一般人の来場も十数名程度であった。当日は雨天となり悪条件となってしまったが、一応外部からの観衆も得られたということで成果はあったと思いたい。240 席の座席を用意したが、9 割程度は埋まっていた。もっと宣伝活動に力を入れればそれなりに外部からの観衆を増やすことは可能だったかもしれない。特に本学ホームページへの情報記載が一週間程度しかされなかったという点については反省材料であろう。しかし、受け入れ側の人員も足りておらず、これよりも大きな聴衆に対処できたかどうかは疑問であり、結果的にはうまくいったと考えるべきだろう。

本学学生でワークショップおよび劇公演に参加したものは概してこの企画に満足していたと思われる。劇の後に配布したアンケートでも、上にその一部を紹介したように、好意的な感想を書いているものがほとんどであった。本学の学生のほとんどは観劇という経験自体が少なく、ましてや生の英語による文学作品の舞台化という今回の出物を見る機会などは皆無に近いことであると推測される。また演出家による演劇ワークショップも非常に貴重な機会となった。学生はこのような機会を得たことだけでも多いに感激していたということがわかった。そして多くの学生が英語の学習や、演劇というコミュニケーションの形の重要性を再認識し、この体験がおおいにこれからの動機付けにつながったと述べていた。その意味で、今回の学部プロジェクトの企画は成功したと考えるべきであろう。

また今回の経験を踏まえて、さらに演劇という活動あるいは演劇で用いられるコミュニケーションの方法を、外国語学習、あるいは様々な分野でのディスカッションや討論といった活動に応用していく方法について研究してゆく必要があると思われる。また、イギリスという演劇の盛んな文化から、教育の場における演劇の活用方法などを学ぶとともに、日本の演劇の伝統についても目を向け、その独自の表現方法について改めて学び、それを独自のコミュニケーションの手法として活用したり、諸外国に向けて紹介したりする方法についても研究してゆくことが重要であろうと思われる。

## 公演実施までの経緯ほか

電話やメールのやり取りによって実施が決定してから、事前に劇団のエージェントであるアシュリーアソシエイツの井上和子氏が 9 月 28 日水曜日に来学し、公演のための下見と本学担当者（樹下、丸山、富田、吉本）とミーティングを行った。入場者

数の予想数から、大講義室での上演も検討したが、ステージの裏に通路がないことや舞台袖が隠せないことなどの構造上の問題点を理由に断念した。

上演の日程を2011年11月18日（金曜日）とし、17:00開場、17:30開演とした。劇団員6名と演出家1人の構成で、公演前日昼頃に東京より飛行機で来広した。この日、若い役者たちが広島市の平和資料館などを見学したいという希望があったので、本学学生（四年生2名）がガイド役を買って出て、彼らの道案内などを行いつても喜ばれた。

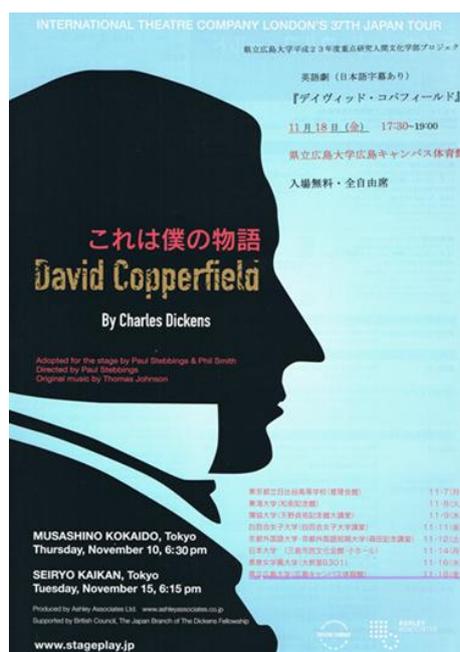
公演当日は、レンタカー（10人乗りワゴン車）で1時頃に来校した。舞台装置を車で持参し、当日公演前の時間を使って舞台の設営や準備を行った。公演終了後は広島に一泊し翌日広島空港から東京経由で英国へ帰国した。



劇団員、演出家と本学学生



実施責任者吉本と演出家ポール・ステビンズ氏



公演用ポスター（A4版）

## ITCL について

ITCL (International Theater Company London) はWIZARD OF JAZZ『ジャズの魔法使い』で1992年初来日した。これは1990年ミュンヘンビエンナレー演劇祭で最優秀創作戯曲としてイーヴニングスター賞 (“AZ Star”)に輝く作品で、ロシアの演出家マイエルホルドの信条であり又ITCLの基調音でもある「微笑をたたえた悲劇」を色濃く反映している。94年にはディケンズの『オリバー・トゥイスト』が銀座マリオン劇場で上演され、原作400頁が「簡潔で、飽きさせず、生き生きとした作品に纏められている。」とジャパン・タイムズ誌で評された。以来毎年2回春と秋に来日し、音楽とドラマの力が絶妙にバランスされたITCL独特の演出で、観るものを魅了している。

5、6人という少人数の劇団であり、舞台装置や照明、あるいは音楽は必要最低限にとどめ、創造的な脚本と演出、それらを最大限に生かす役者の演技力とによってユニークな公演を行っている。

過去の上演作品は、『動物農場』、『オリバー・トゥイスト』、『シャーロックホームズの殺人』、『デイビッド・クーパーフィールド』、『ガリバー旅行記』、『ピグマリオン』、『欲望という名の電車』、『カンタヴィルの幽霊』、『すばらしい新世界』、『ジキル博士とハイド氏』、『ドリアン・グレイの肖像』、『ポーの幽霊たち』、『マクベス』、『1984』、『真夏の夜の夢』、『ハムレット』、『クリスマス・キャロル』、『ロミオとジュリエット』、『リア王』、『じゃじゃ馬馴らし』、『フランケンシュタイン』などで、シェイクスピアの本格的演劇作品を始め、英文学史上に残る名作を多数とりあげて、独自の視点で脚本化し上演しており、英文学や英文化を学ぶものにとって教育的にも非常に意義深い内容になっている。

多くの教育機関を後援者として上演を行ってきたが、大学では、早稲田、立教、青山学院、学芸、亜細亜、東海、神田外語、慶応、新潟、京都橘女子、恵泉女学園、同志社女子、四国、松山、明星、活水女子、西南学院、大谷、桜の聖母短期、茨城キリスト教、弘前学院、宮城学院女子、広島女学院、安田女子、沖縄キリスト教短期、札幌学院、北星学園短期、帯広大谷短期、盛岡、弘前、大阪樟蔭女子、就実、関西外国語、東京女子、津田塾など69校。高校ではASIJ (アメリカンスクールインジャパン) 麻布高校、日比谷高校など10校。その他、全国主要都市の市民ホールなどで公演してきた。公立大学がこの劇団の公演を主催することは本学が最初であった。

## 演出家ポール・ステッピングについて

創立以来、芸術監督を務めるポール・ステッピングズは「芝居とは異文化コミュニケーションの媒体でもある」と信じ、終始国際的な場で活躍、ここ数年来、英国ペー

スのどんな劇団より数多くの海外公演をこなしている。96年『白鯨』がギリシャにて開催されたミュージックフェスティバルで満場一致で最優秀作品と認められ、03年のテヘランでの国際演劇祭では『マクベス』が最優秀賞を授与されるなど、その芸術的評価はますます高まっている。

ポール・ステッピングズはまた演出家、脚本家、役者として世界規模で多彩な活躍を繰り広げている。ポールは「身体表現とは絵のように塗りたいことではなく、彫刻のように掘起こすこと」と考え、彼の指導する身体表現ワークショップは緊張をときほぐすエクササイズ、想像力を駆使しながら誰にもできるシアターゲーム、発声のメカニズムとトレーニングなどを通し、普通の人に身体を使う表現の喜びを体験させる。これはコミュニケーションとして使う英語を学びながら苦勞している多くの英語学習者に大変人気を博している。

## 役者紹介

◎ジョージ・マクレーン(George McLean)：デイヴィッド・コパフィールド役

2007年ロンドンのドラマスクール ALRA を卒業後、BBC（英国放送協会）で、古典作品やニュー・ライティングの作品、そして教育分野の演劇関連のテレビとラジオ番組に出演。『セールスマンの死』、『ガリバー旅行記』でも好演。Oxford Shakespeare Company では『ロミオとジュリエット』のティボルト役を経験した。スポーツを愛し、サッカーはリバプールのファン。様々な国へ旅行し、様々な観客の前で演じる事を楽しみとしている。

◎エミリー・ブラウン(Emily Brown)：ペゴティー、ドーラ、ミス・マードストーン役

East 15 Acting School で演劇を学ぶ。2001年に卒業後ヨーロッパ各地でシェイクスピア劇から子供向け演劇など様々なプロジェクトに参加。American Drama Group の THE IMPORTANCE OF BEING EARNEST (『真面目が肝心』) 公演では Tour De Force と共演し、グウェンドリンとミス・プリズム役を演じた。他にも『美女と野獣』、『夏の夜の夢』、『ナーサリーライムランドのハンプティ・ダンプティ』などに多彩な役で出演。

◎ピーター・マクミラン(Peter McMillan)：スティアフォースとマードストーン氏役

University of Hull と Oxford School of Drama で役者の修行を積む。LARK RISE, WIDOWS, THE BALD PRIMA DONNA など多数に出演。9歳からクラリネットをはじめ the City of Hull Youth Symphony Orchestra で首席クラリネット奏者を務めブダペストとベニスへの演奏ツアーに参加した。ピアノも得意。常に音楽への情熱を演劇でも発揮している。

◎エイリッド・デボネア(EilidhDebonnaire) : エミリーとクララ・コパフィールド役  
Rose Bruford College of Theatre and Performance で役者兼ミュージシャンとして修行する。彼女は演技者であるだけでなく演劇における生の音楽演奏に強い関心を持つ音楽監督である。ロンドン在住でミュージカルのワークショップや若者の合唱団向けの仕事をしている。『長靴をはいた猫』やビゼーの『カルメン』その他多数の出演経験あり。

◎ジョー・ハーツフェルド(Joe Herzfeld) : ペゴティー氏とルーサー役  
Oxford University にて歴史を学ぶ傍ら様々な出し物に出演した後、Mountview Academy で修行。2008年以後 Heartbreak Productions で野外劇に多数出演した。シェイクスピアの『ヘンリー八世』のフランス王役、『お気に召すまま』のジャック役、『秘密の花園』のコリン役など多数で好演。彼は喜劇作家でもあり即興劇もこなす。多くの独立系映画の中でも即興劇で出演した。出演する劇やロックやアコースティックのバンドに曲を書く作曲家でもある。

## まとめ

## 樹 下 文 隆

人間文化学部では、大学重点研究事業の学部プロジェクト研究として、学生のコミュニケーション能力の向上に取り組んできた。昨今、若者のコミュニケーション能力の不足を嘆く風潮があり、このような取組には時代の要請という側面を否定できない。しかし、コミュニケーション不足を単に意思の疎通と置き換えれば、世代間でのコミュニケーションの欠如ほどの時代にもありえたであろうし、今の若者同士のコミュニケーションは数十年前よりも洗練されているという一面もある。コミュニケーションは他者の存在が不可欠なので、その能力の向上のためには自己分析と他者理解が必要となる。現在、若者のコミュニケーション力不足を特に問題視するのは、モラトリアムの時期に自己同一性を獲得できない若者の増加を危惧するからではないだろうか。

多様な社会構造の中、情報が無制限に氾濫している現代においては、これまで以上に若者のアイデンティティ獲得には困難を伴う。規範とすべき社会正義や人生観への不信感が他者と積極的な関係を結ぶことを躊躇させると同時に、関係を結ぶべき他者の範囲がこれまで以上に増大している。コミュニケーションは、自分と相手の立場を認識し、互いに信頼と尊敬の気持ちをもって相手と向き合い、両者が対等の関係であれば成立する。外国語能力と異文化理解と国際交流を本研究の中核に据えたのは、拡大した他者とのコミュニケーションが、これからの若者のアイデンティティ獲得にも重要な要素となりうるからである。

従来、アイデンティティは地域生活の中で自然に醸成されるか、読書や規範とすべき先達への師事と内省の繰り返しで得られるものであった。しかし、情報が氾濫し、正義が単純には見極められない今日の社会状況からすれば、従来のやり方はいささか迂遠であると言わざるを得ない。自我が他者との違いを自覚することで形成されるとすれば、自他を繋ぐもっとも便利なツールは対話であるから、言語能力を高め、接触しうる他者の範囲を拡大することで、自己を深く見つめ直す機会も増えることになる。実際、この取り組みの中で西安やソウルの大学生とふれあった学生諸君の感想には、勉学や問題意識の持ち方についての反省が多く見られた。

言語には、音声と文字以外に身体表現も含まれる。外国語運用力の向上に向けた取組だけでなく、今年度は新たに身体表現を含めての言語能力の向上を目指した。演劇鑑賞や演劇ワークショップを通して、身体表現がコミュニケーションの重要な手段となりうることを改めて認識した学生も多かった。同時に、伝えたいことをよりの確に表現するためには、一度それを相手の立場で客観的に分析することが重要であることを、演技を通して体験した学生もいたはずである。学生交流や異文化体験、演劇体験により、想像力を高めることがコミュニケーション能力の向上にも有益である。

## 【活動記録】

- 第1回会議 7月14日（木）10：40－12：00  
進め方について協議
- 第2回会議 8月4日（木）10：40－12：00
- 1 国際交流事業 ソウル市立大学校訪問の具体計画
  - 2 国際交流事業 ハワイ大学ヒロ校マノア校訪問の具体計画
  - 3 外国語能力向上のための検定試験の利用と結果分析
- 第3回会議 9月8日（木）10：40－12：00
- 1 国際交流事業 ソウル、ハワイの日程の確認
  - 2 演劇教育 劇団招致について協議
  - 3 韓国語検定試験の確認
- 第4回会議 10月4日（火）14：40－16：00
- 1 ソウル市立大学校訪問の報告
  - 2 ハワイ大学ヒロ校マノア校訪問の報告
  - 3 英語劇の上演とワークショップの開催について
- 第5回会議 11月8日（火）10：40－12：00
- 1 英語劇の上演とワークショップの開催の準備
  - 2 春期、来年夏期の短期留学構想
- 第6回会議 12月6日（火）16：20－17：30
- 1 春期の短期留学計画について
  - 2 報告書の作成について
  - 3 ホームページへの掲載について
- 第7回会議 3月1日（木）16：20－17：30
- 1 報告書の編集状況の確認

[研究組織]

人間文化学部国際文化学科

研究代表者 樹下 文隆

共同研究者 丸山 浩明 国際交流関係・語学検定支援担当  
富田 和広 演劇教育担当  
吉本 和弘 演劇教育、英語教育検定支援、ソウル交流担当  
侯 仁 鋒 中国語教育検定支援、西安交流担当  
S.L.ローゼン ハワイ交流担当  
鄭 遇 澤 韓国語教育検定支援、ソウル交流担当  
原 理 ハワイ交流担当

研究協力者 西原 貴之 英語教育検定支援担当

平成23年度県立広島大学重点事業 学部プロジェクト研究  
国際交流の継続と異文化コミュニケーション能力向上に関する研究  
報告書

平成24年3月30日

県立広島大学人間文化学部

〒734-8558 広島市南区宇品東一丁目1番71号